

清末小説から 112

2014.1.1

いくたびかの阿英目録4 樽本照雄 1
 《披蘿帶荔》の原作..... 渡辺浩司 7
 早期漢訳ドーナ「最後の授業」1 胡適訳「最後一課」のばあい..... 神田一三 19
 傅兰雅与小説..... 刘 德隆 30
 徐兆璋日記中の近代小説與出版史料 1 ——以小説林社為中心..... 樂偉平選註 37
 清末小説から7、18、36、39

本年もよろしくおねがいいたします。新春を記念して特別増大ページ号になりました。研究会ウェブサイト『清末民初小説目録 第5版』を掲げています。ご利用ください。継続し罍

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

劉鉄雲(鸚)著。20回。光緒三十三年(1907)神州日報刊。2冊。又天津日日新聞本。1冊

劉鉄雲(鸚)著。20回。光緒三十三年(1907)神州日報刊。2冊。又天津日日新聞本。1冊

いくたびかの阿英目録4

『神州日報』および『天津日日新聞』のふたつをならべたから原文は2行になった。

樽本照雄

ざっとながめて、問題はなさそうに見える。おおかたの反応は、そうだろう。せいぜいが「刊」と「本」で異なっているのに気づく人がいるくらいか。

「老残遊記」を例にして

「老残遊記」について、阿英目録は次のように記述している(アラビア数字に変更した箇所がある。[阿英76]は、阿英目録76頁を示す。以下同じ)。

波線の使い方から、新聞『神州日報』と新聞『天津日日新聞』の両方に掲載された、と読む人がいるかもしれない。傍線は、それを意味している。だが、そう考えるのは間違いだ。なぜか。ここを見ているだけでは、その理由は理解できない。

[阿英76] 老残遊記 洪都 百鍊生

「老残遊記」の発表経緯を知っていると、阿英の記述が不十分だとわかる。あ



1907神州日報館版 『唐弢藏書・図書総録』から 1906天津日日新聞社版 天津孟晋書社発行

るいは、傍線、また漢字の使い方に疑問がわいてくる。

はじめから見ていこう。

著者として洪都百鍊生と劉鉄雲がならべて置いてある。実際は、洪都百鍊生のみが使われた。劉鉄雲（鶻）はあとからの知識だ。阿英の判断で併記したとわかる。

「老殘遊記」が最初に掲載された『繡像小説』雑誌をなぜ記述しないのか。阿英が初出雑誌の存在を知っていて触れない理由は、不明。説明不足のひとつである。「老殘遊記」の執筆と雑誌新聞への掲載過程などについては、詳細をのちほど述べることにしている。

問題は、波線部分の『神州日報』だ。

波線だから掲載新聞名を表わしている、と普通は受け取る。それが阿英の採用した記号の原則だ。しかし、「老殘遊記」が新聞『神州日報』に連載された事実はない。あとで出てくる抽印本（抜き刷り本のこと）でもないのだ。こちらは、はじめから単行本である。この1907年「刊」という該書は、神州日報館が刊行した。正しくは、「神州日報館」と表示し、それには直線を引くのがよろしい。そうすれば「刊」という単行本を示す単語と矛盾しない。

念のために書いておく。「神州日報館刊」とすれば問題はない。誤植かとも思う。だが、「館」がないのだから、阿英の書き誤りだろう。

一方の『天津日日新聞』本は、どうか。よく知られているように、阿英は『天津日日新聞』から切り抜いた「老残遊記」第1-10回の1冊を所蔵していた*18。

新聞連載の小説部分だけを私的に切り抜いたもの。販売を目的とした単行本ではない。それを阿英は「本」で区別した。新聞掲載を意味している。1冊と表示していることとあわせ考えれば、手製の冊子にした私家版だと推測できる。矛盾はない。正しく記述していると私は判断する。

上に見える「天津日日新聞本。1冊」は、この切り抜きそのものを指す。

「本」は、新聞掲載を表わす。ところが、つぎに「1冊」をつけ加えた。ここが切り抜き本である証拠だ。

刊年不記である。新聞を切り抜いた部分、または裏面に出版年時(発行年月日のこと。本稿は刊年と称している)を示す字句は印刷されていないらしい。刊年についての説明がない理由だろう。「老残遊記二集」の新聞切り抜き本には刊行月日が大きく印刷されていたのとは違うようだ。私は二集の実物を見ているから断言できる。

阿英の切り抜き本は、手作りの私家版だ。

一方で、該作品には、書店から正式に刊行されたものが別にある。『天津日日新聞』連載後、単行本として刊行されたのがそれだ。新聞の紙型を利用し抜き刷りにした抽印本である。私は、「天津日日新聞社印刷」「天津孟晋書社発行」と明記した本を天津図書館で確認した(写

真参照)。ただし、刊年は不記。1905年9月末から新聞連載が始まったものなら(後述)、その単行本は1906年刊行だと考えて間違いはないだろう。

神州日報館が1907年に単行本を刊行した。阿英目録には、そう記録してある。また、実物が唐弢の所蔵で目録に掲載されている。そうくり返して確認するのは、違う説明をする文章が発表されたからだ。

商務印書館『老残遊記』1907年版

袁進主編『中国近代文学編年史：以文学广告为中心(1872-1914)』(北京大学出版社2013.5)である。



上に説明したことは異なる見解を資料にもとづいて述べている。

該書は、新聞広告を材料にした中国近代文学史だ。広告そのものを採取していて珍しい。

そのなかに周羽「《老残遊記》的藝術成就」(278-281頁)がある。

1907年9月6日付『時報』所載の上海商務印書館広告が、『新小説老残遊記』彩絵封面精印洋装2冊定価大洋5角となっている。

その広告には、前数回は本館刊行の『繡像小説』に掲載していた。全部を刊行し版權が本館に帰した、などと書かれている*19。

この記事が重要なのは、商務印書館が1907年の時点で『老残遊記』を発行したと宣伝していることだ。

私は、商務印書館1907年版は見たことがない。商務印書館1912年版大本ならば、従来からその存在が知られている。『涵芬樓新書分類総目』(商務印書館 刊年不記1914?)が収録しているからわかる。しかし、この涵芬樓総目には、1907年版は収録されていない。自社刊行物を収蔵していないのは、少し不思議な気がする。

一瞬奇妙な感覚に襲われた。刊行予告ならば、実際には出版されなかった可能性がある。だが、その文面は、すでに刊行して版權まで商務印書館が取得したとある。上で検討した阿英目録にも採録されていない。阿英が掲げるのは、『天津日日新聞』切り抜き本と1907年の神州日報館本だけだった。新聞広告によると、1907年には神州日報館と商務印書館が同時に『老残遊記』を発行したことになる。そのような説明があったのかどうか、思い出せない。疑問がでてくる。しかし、新聞広告は事実らしい。ならば、私の知らない版本になる。

周羽の説明を見よう。「老残遊記」の刊行経過をのべている。周羽の文章に便宜的に番号をふり、そのあとに私の注釈を加える。

1 「老残遊記」は1903年9月21日『繡像小説』第9期に掲載され、その年旧曆十二月の第18期で終了、1回から9回である。署名は「洪都百鍊生」だ。278頁

筆者注：署名、雑誌連載開始の期数および刊年ともに正しい。だが、終了の第18期を旧曆十二月とするのは、誤り。しかも、掲載は9回ではない。13回(実質は14回)である。ここで必要とされるのは、なぜ連載が中断されたかという情況説明だ。それがない。広告に見えるように、連載中断があったことを商務印書館自身が認めている。『繡像小説』編集部による有名な「老残遊記」原稿第11回没書事件だ(後述)。周羽は、なぜこれをいわないのか。連載回数を9回と間違うところから、実際に雑誌で確認したかどうか、疑われる。『繡像小説』第13期から刊年を記載しなくなる事実も視野には入っていない。樽目録に「老残遊記」の雑誌連載について「『繡像小説』9-18期 癸卯8.1-刊年不記[癸卯12.15](1903.9.21-[1904.1.31]とするは誤り)」と書いても、見ていなければしかたがない。最近は、中国学界でも『繡像小説』発行遅延説を認める論文が出てきた。研究の進展に周羽は逆行している。こういうばあいにこそ、袁進主編が出てきて指導すべきだと私は思う。

2 のち『天津日日新聞』に改めて掲載され、20回まで続いた。1907年、該新

聞は二集9回を發表する。278頁

筆者注：『繡像小説』連載中断のあとで『天津日日新聞』に連載されたのは、その通りだ。ただし、周羽は、その連載時期を書かない。すでに、郭長海「劉鉄雲の佚詩和几件聯語」(『清末小説』第33号2010.12.1)があるにもかかわらずだ。

『天津日日新聞』連載は、光緒三十一年九月初一日(1905.9.29)の「自序」掲載からはじまっている。郭長海が明らかにした。それを知らない周羽は、勉強不足である。二集發表については、1907年刊行で正しい。

周羽は、なににもとづいて『老残遊記』の版本を説明しているだろうか。阿英目録ではない。また、樽目録第3版を見ているわけでもない。樽本編『清末民初小説目録 第5版』(2013.4.15清末小説研究会ウェブサイト<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>公開。以下、樽目録第5版と称する)も、視野にはなさそうだ。『時報』の商務印書館広告だけを頼りに組み立てた推論のように見える。そうすると、従来 of 書籍目録、あるいは『老残遊記』版本研究は、周羽にとってまったく役に立っていないということだ。

3 1906年に初集単行本が上海商務印書館より出版發行された。翌年9月、商務印書館は『時報』1153号に広告を掲載し該書を宣伝したのは上の全文のとおり。278頁

筆者注：周羽の説明によると、1906年に商務印書館が単行本を刊行し、翌1907年にそれを新聞広告で宣伝したことになる。これは奇妙だ。だいいち、1906年初

集単行本が商務印書館より出版されたことは、ない。新聞連載した『天津日日新聞』から抽印した単行本だ(天津・孟晋書社發行、刊年不記。写真参照)。刊年は印刷されていない。だが新聞連載開始が1905年ならば、1906年に連載は完了する。その単行本刊行は、1906年でよい。1906年版は商務印書館刊行ではない、と重ねていう。すると1907年の刊行広告が商務印書館のものだ。

いままで見た書目に、1907年商務印書館版は存在していないと考えていた。1907年発行といえば、阿英目録にある神州日報館本が有名だ。しかし、『時報』広告は、1907年に商務印書館も『老残遊記』20回本を出版したことを明記している。過去形だから、確かに出版したはず。

疑問をひとつ提出しておく。劉鉄雲「老残遊記」は、『繡像小説』編集部による没書事件によって連載を中断した。両者の関係は切れている。おまけに『繡像小説』の主編だった李伯元が逝去したあと、盗用問題が発生している。李伯元名義で発表する「文明小史」は、彼の死後も継続して掲載された。死者が原稿を書くはずがない。協力者であった欧陽鉅源が代筆したと考えられる。そのなかに没書にしたはずの劉鉄雲の原稿第11回から「文明小史」に盗用する箇所がある。これが盗用問題だ(後述)。そういう経緯があるにもかかわらず、版元の商務印書館があらためて「老残遊記」の版權を取得したとはどういうわけか。誰が、版權移譲の交渉に当たったのかも不明だ。劉鉄雲の息子大紳くらいしか思いつかない(1887年

生まれだから1907年当時は数えで二十一歳だ)。だが、劉大紳「關於老殘遊記」(1939)にその記録は、ない。

もういちど調べ直すことにした。

書目を再点検すると、なるほど商務印書館1907年版らしきものが収録されている。『新小説老殘遊記』色彩表紙2冊かどうかまではわからない。だが、あることはある。今まで、私は見落としていたらしい。証拠を列挙する。

証拠1 [『東方雜誌』8:1広告] 各種小説 社会小説 老殘遊記 2冊5角

この広告とは、商務印書館「商務印書館出版圖書総目録」(『東方雜誌』第8巻第1号1911.3.25)である。該誌は1911年刊行だ。ここに見える『老殘遊記』は、1911年以前に発行されているとわかる。書目によく見る1912年版ではない。

証拠2 [営業361] 社会小説 老殘遊記 2冊5角「是書作者就遊歷各省時所聞見演為小説，其於当时官吏情形及各處土風民俗所記半為実事，可作野史讀，至文筆透澈，議論奇警，猶其余事」361頁

周振鶴編『晚清營業書目』(上海・世紀出版集團、上海書店出版社2005.4)に収録された書目だ。『商務印書館書目提要』(宣統元(1909)年十月改訂八版)である。1909年出版の目録に掲載された「老殘遊記」は、それ以前に刊行されたことになる。1907年版の可能性が強くなる。

証拠3 [書坊訂811-11] 光緒三十三年鉛印《老殘遊記》二十卷(26)147頁

韓錫鐸、王清原、牟仁隆『小説書坊録』(北京図書館出版社2002.4)である。韓錫鐸、王清原編纂『小説書坊録』(瀋陽・春風文藝出版社1987.11)の増訂版だ。

書坊録とは、出版社別に分類して集めた小説目録をいう。つまり、ここに収録された単行本作品は、出版社を主体にして編纂された。811と番号を振られた商務印書館の刊行物に『老殘遊記』がある。

光緒三十三年は、1907年だ。以前は1912年版しか知らなかった。だから、1907年版は誤りだと思ったのだ。樽目録第5版では、「光緒三十三年⁷³鉛印、この版本は存在しない」とわざわざ注をつけた理由である。訂正する必要があるかもしれない。

『小説書坊録』は、拠った目録が数字で明記されている。上の「26」は、『浙江省図書館蔵目録』だという。ウェブで検索すると、浙江図書館にそれらしい『老殘遊記』を見つけた。図書情報の複写画面を掲げる。



ウェブ版浙江図書館蔵書目録

残念ながら書影はない。しかも、出版年代不詳とあるではないか。そうすると、『小説書坊録』が明記した光緒三十三年

はどこから引っぱってきたのか根拠が不明になる。電字記録には掲載がなくても、紙媒体の蔵書目録には掲載がある可能性を否定できない。

私が今できることは、ここまでだ。中国の研究者に問い合わせている(参照:樽本「商務『老残遊記』1907年版」)。商務印書館1907年版彩色表紙の『老残遊記』2冊が出現することを願う。 罍

【注】

- 18) 阿英「老残遊記版本考」は「關於老残遊記二題」所収『小説二談』上海・古典文学出版社1958.5。60-61頁
- 19) 広告全文を引用する。278頁。『時報』1907.9.6広告「新小説老残遊記 / 是書借老残遊以叙官吏酷虐之現狀筆墨透徹最是動人前數回曾載本館刊行之繡像小説讀者皆以未窺全貌為憾今已全稿刊行仍將版權歸本館彩繪封面精印洋裝二冊定價大洋五角上海商務印書館啓」

『清末小説から』第111号

2013.10.1

いくたびかの阿英目録3……樽本照雄
《狗之日記》の原作……渡辺浩司
『吟辺燕語』批判の謎……沢本香子
清末小説から

《披蘿帶荔》の原作

渡辺浩司

1

《小説月報》第六卷第六号(商務印書館、1915年6月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》を使用、発行年月日は『清末民初小説目録 第5版』(樽本照雄編、2013年4月15日)による)に、《披蘿帶荔》なる短篇作品が掲載された。書名下に“H. D. Hawtry Dorothea Canyers 原著”“鐵樵”とあり、翻訳であることはわかっていた。このたび、原作名や正確な著者名が判明したので本稿で報告する。

原作は『The Moth』、原作者は H. C. Hawtreay and Dorothea Conyers、掲載誌は『The Strand Magazine』Vol. 46-No. 273(George Newnes, 1913年9月)。

原作者 H. C. Hawtreay は未詳。同時代の「H. C. Hawtreay」には、英国陸軍軍人で、1906年にギリシアで開催された Intercalated Olympic Games の陸上競技5miles レースで優勝した、Henry Courtenay Hawtreay(1882年生、1961年没)がいる。彼の経歴と本作を結びつけるのは難しい。しかし、金メダル獲得からわずか7年後なので、「H. C.

Hawtreys」を見れば、恐らく読者は彼を連想したであろう。故に、もし別人ならば名前は略さないと思う。また、共作者の Dorothea Conyers の一度目の配偶者 Charles Conyers(1892年結婚)は陸軍士官だったので、そのつながりで親交があったとも想像できる。薄弱な論拠であるが、「H. C. Hawtreys」= Henry Courtenay Hawtreys の可能性も捨て切れぬと思う。

同時代には、もう一人、『A Short History of Germany』(The Bay View Reading Club, 1905年)*1を著した Mrs. H. C. Hawtreys(生卒年未詳)がいる。他に、Emily Hawtreys 名で『Outline History of Germany』(Longmans and Co., 1896年)の著書もある。こちらも著述という点だけで、甚だ頼りない論拠であるが、「H. C. Hawtreys」= Mrs. H. C. Hawtreys の可能性も残されると思う。「H. C. Hawtreys」は一体誰なのかの確証探しを続けたいと思う。

Dorothea Conyers は、アイルランド出身の英国の作家で、1869年或は1873年生*2、1949年没、50冊以上の著作がある。

訳者“鐵樵”は、同誌編集責任者でもあった惲樹珏で、原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没。

2

原作『The Moth』のあらすじを紹介する。

私(Grey)がシエラレオネに駐在していた時、Bill Summers と親しくなった。彼はたくましく、頭がよくて、生まれながらの放浪者だった。これまでに、農夫、船乗り、技師、金鉱掘り、調理人等を経

験していた。アフリカでも働いたが、それに飽きて、休んでいるところで、自ら建てたバンガローで暮らしていた。彼は私を招待した。彼の部屋で、白檀の箱に入った、きれいに剥製にされた大きな蛾を目にした。きれいだったが、白いありふれた種で、なぜ保存しているのだろうと不思議に思った。彼は私の様子を察し、絶対に手放さないようにしており、死んだ時は一緒に埋めてもらうつもりだ等と話した。彼の声は悲しげだった。話の続きを待ったが、彼は話さなかった。私は「人は死ぬとその魂が蛾に宿る、と現地の方が言ったのを聞いた」等と話した。突然、彼は「それは聞いたことがない」等と言った。顔色は白くなり、両の拳を固めたので、私は触れてはいけなかったかと思い、蛾から離れ、アフリカの奇妙な習慣や迷信に話を移した。「川の上流には野蛮な種族が住んでいるだろう」等と話すと、彼は「変わった所だ」と言い、更に「どの土地にも珍しい出来事があるものだ」等と話し、蛾に目をやった。表情はとても悲しくなっていた。彼は蛾に向かってうなずきつつ「貴方にお話ししよう、まだ誰にも話さなかったことだ」等と言った。彼は座ってしばらく物思いにふけていたが、やがて話し始めた：

-

少年期、技師として訓練していた時、父が亡くなり、お金も無くなり、一家は離散した。金持ちになる夢を抱いて、カナダに渡った。夢は消えたが、学習が速かったので、カナダ太平洋鉄道の正社員になり、十分な食事と生きる権利を手

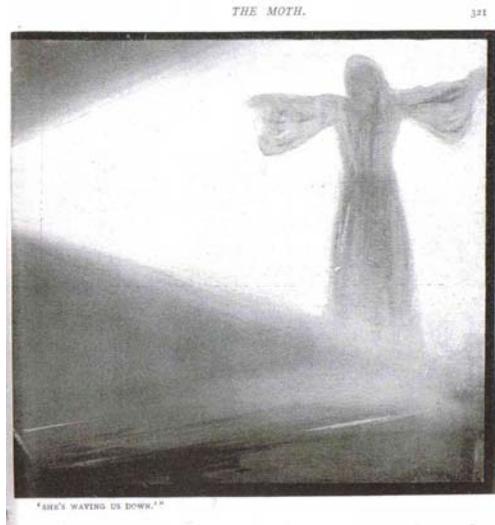
入れた。すぐに運転士に昇進した。そこで、Jenny に出会った。彼女は上品だったが、私同様に貧しかった。私は彼女に運転士の妻として幸せに暮らさないかと提案した。私たちはすぐに結婚し、小さいが快適な家を持った。10月に結婚し、4月に彼女は病気になった。熱病のようだった。彼女は決して医者と呼ばなかったが、病気は重かった。お金はすべて彼女の薬や食べ物になり、看護人を雇う余裕は無かった。家にいる時はずっと心配しながら彼女と過ごした。私は普段、夜に Koolnay から Bloville まで急行を走らせ、早朝に Bloville から Koolnay まで列車を走らせ戻っていた。到着する7時にはいつも大変疲れていた。彼女はいつも朝食を用意してくれていた。帰宅後は、夜に備えて数時間熟睡した。今、彼女は病気であえぎながら寝ていた。彼女は全く不平を言わず、長く寂しい夜のせいで消耗していた。私は部屋を片付け、彼女に紅茶を入れ、自ら朝食を用意した。彼女のそばを離れたくなかったが、私は無理に休息した。会社は人手不足で休暇を取ることはできなかった。彼女を看護しながら列車を走らせ、3日間睡眠が取れない状態になり、非常に疲れていた。3日目の夜、私は出かけようとしていた。彼女は弱っていたが、楽そうな素振りで、朝にはよくなっているから等と私に約束してくれた。彼女の横に飲み物と薬を置き、縮んでしまったようなその顔にそっとキスして出かけた。彼女は「見守っているわ、Bill、走っている時もね」等と熱に苦しむ声で言った。

春の雪解けの時期で、川は増水し急流が轟いていた。その夜は霧雨でもやが濃く、その中をよろよると歩いた。すべての感覚で警戒が必要な仕事に、睡眠不足で従事するのは大変に耐え難いことである。重い気分で機関車に着き、石炭補給の Jack を見つけた。霧雨は白く濃い霧になっていた。妻の具合を聞かれたので、悪いと答えた。また「誰かと代われないのか」等と聞かれたので、「そうすればクビになる、今、失業するわけにはいかない」等と答えた。疲れを忘れて、機関部を点検し、運転室に入り、操作を始めた。機関部は元気に蒸気を吐き、客車の方へと後退した。機関部は強力だが Jenny のように優しく、運転士にとっては生き物なのである。すべては整ったが、頭はくらくらし、また霧のため駅の明かりはぼんやりし、重々しい雰囲気でも長くついで夜行運転になりそうだった。ホームの乗客は少なかった。我々の監督が貸し切り車両に人を案内するのが見えた。監督は短気で、我々はずっと恐れていた。彼がやって来て「あの方々は国会議員で、Bloville で Ottawa 行の急行に乗り換える、時間通りに走らせるんだ」等と言い、妻の具合を尋ねた。私が「よくないので、何とか休みを」等と言うと、彼はそっけなく「今は無理だ、とにかく人手が必要だ」等と言い、「あるいは Montreal から新人達を呼べるかもな」等と不気味に話した。私は気落ちして、列車を出発させた。夜に急行を走らせるのは楽ではなく、すべての信号に注意が必要だった。迷った牛が線路上に横たわり、列車に衝突し

損害が出れば、我々の責任になるのである。Jack と私は、通過する小さな駅の信号が白く点滅し、止まれを示す赤ではないのをしっかり見ていなければならなかった。

列車は Black Springs を過ぎ、Shole Hill の急勾配の前の長い平野部を進んだ。Jack は左に、私は右におり、暗闇を裂くヘッドライトの明かりを見ていた。私は驚いて声を上げた。前方の霧に、腕を振って合図を送る巨大な女性の影が見えたのである。両腕を肩と平行になるまで上げ、下に下ろす動作の繰り返して、列車を止めるという意味だった。私は蒸気を止め、注意深く見た。人としてはあまりに巨大で、全速力の列車の前に立ってられるはずもなかった。Jack を見ると、しっかりと外を見張っていた。私はうめき声を上げた。眠気からの幻覚ならば、運転を止めなければならない。しかし、私はそのまま走った。Shole Hill は長く急な上り坂で、頂上の後は急な下り坂と急流の川にかかる Slaveboy 橋を越える大きなカーブがあった。Jack は私を見て「何か見たのか?」と尋ね、「丘に向かって速度を上げた方がいい」等と言った。私は「影だった」と言い、列車を進めた。更に2マイル(1マイル 1.6km - 渡辺注)進んだ所で、再びあの像が現れた。巨大な女性が合図を送った。Jack は石炭を補給しており、私が「Jack、こっちへ、前のあれは何だ?」等と叫ぶと、駆け込んで来た。彼は「何も無い、どうしたんだ?」と叫んだ。「人が - 合図を送ったんだ、霧の中だ、2回目だ、女性が

- 止めようとしたんだ」等と言うと、彼はポケットから携帯用の酒瓶を出し、「誰もいない、1口やれ、心配と疲れで参ったんだ、奥さんのことを考え続けていたからな、座れよ、しばらく俺が運転する」等と言った。私は1口飲んだが、首を振って、運転を続け、「違う、あれは Jenny だ、彼女は見守ると言ってくれた、家を出た後、彼女は死んだんだ、前にいたのは彼女だ」等とかすれた声で言った。惨めさのあまり泣きたくなった。彼は「もう1口、睡眠不足からの妄想さ、丘に向かって行こう」等と言った。彼は炉の方へ戻り、私は上り坂を運転し、列車は全力で走った。しかし、丘の途中で、また巨大な像がぼんやりと現れた。繰り返し腕を上げ下げし、私が従わないのを怒っているかのようにしつこく合図を送ってきた。私は蒸気を止め、ブレーキをかけた。Jack がとんで来て、「Bill、お前、狂ったのか? 丘の途中だぞ!」等と言った。「彼女がいるんだ、合図を送っている、何かあるんだ」等と言うと、彼は表情をやわらげ、ブレーキから私の手を押しのけ、「止めちゃいけない、検査官がやって来て、飲酒したと言うだろう。彼の車両の明かりが消えているから、こちらに向かっているかも知れない。走らせよう、でないとかビにされるぞ - 前には何も無い」等と言った。ブレーキをゆるめ、列車が速度を増すと、私は「注意しろよ、Jack、前を見ておけよ」等と叫んだ。丘の上に着いた。そこからは Slaveboy Valley への長く急な下り坂で、少し平地があり、左右のカーブがあって、



Slaveboy 橋へと続くのである。下り坂は、橋の一方のトンネルを通過して、停車する Edmonton へと続くので、その間は機関部を休めることができた。Jack は時計を見て「4分遅れだ、今まで無かったことだ、俺が運転するから、お前は休めよ」等と言った。彼は後に、この時の私は死人のように青白く、疲れ切っていた、と私に話した。車輪の音が「Jenny! Jenny! Jenny は死んだ!」と歌っているように思われ、私の心はほとんど死んでいたのである。「いや、俺が運転する」と答えた。我々は遅れを解消するために

全速力で走らせた。彼は「今夜は洪水になるだろう、雪解けが速すぎるのか、雪が塊のまま流れている」等と言ひ、また「連中はあの橋をそれほどしっかりと建てていないと言っていた、春の洪水に耐えるほど十分ではないとな」等と加えた。列車がカーブに来たので、速度を抑えた。「Jack!」私は叫んだ。彼は石炭を供給していた。前方にまたも巨大な像が現れ、合図を送っているのである。「Jack、こっちだ!」彼がとび込んできた。「おお! 彼女が見える、Bill、合図を送っている、あれは何だ?」等と叫んだ。私は

列車を止めようと思い、蒸気を止め、ブレーキ係に汽笛でブレーキをかけるよう知らせた。カーブの途中で列車は止まり、川は前方60ヤード(1ヤード 0.9m - 渡辺注)弱の所にあった。人の声と足音が聞こえたが、前には何も無く、ヘッドライトの明かりだけだった。検査官は「どうしたんだ? 前も止まりかけたぞ、機関部に不具合があるのか、それとも前に何かあったのか?」等と怒気を込めて言った。「機関部には何もありません、誰かが我々に合図を送ったのです」等と答えた。彼は運転席へ乗り込み、「誰かだと! 50マイル以内には人はいないぞ、気でも狂ったのか、Summers」等とどなった。Jack が「私も見たんです、懸命に合図を送ってきたんです、ちょうどこの後ろで」等と言った。Jones 検査官は我々を罵り、出発するよう命じ、「10分遅れた、報告してやる、誰が合図を送れたと言うんだ?」等と話した。見たままを話せば即クビになると思い、合図を送られた、何が前にいたに違いない、と繰り返し説明した。検査官は怒って「これは面白い報告になるぞ」等と言い、外にいる人達に対しては穏やかに「頭がどうかしたんでしょう、奥さんが危 - 病気ですから。Jack、代わって運転できるだろう、彼に任せろ」等と言った。Jack は「ちょっと前を調べたいのですが。本当に合図があったんです」等と言った。検査官は「外に誰がいるって? バカバカしい。自分で見て来い」とどなって、外に下り、我々も急いで線路に下りた。数マイル以内に家は無いのに、誰が合図を送れるだ

ろうか? 誰も私の話を信じないだろう。橋に近づくとつれ、川のうなりが大きくなっていった。ランプで照らし、線路の両側を調べた。霧を裂くような川の急流とその上に伸びる橋の欄干が見えた。検査官は「どうだ、わかったか」と言い、私を見て「お前はもっと易しい仕事に就くべきだ。2人とも夢でも見たのだろう」等と話した。職も妻も失うのか、と絶望的な気持ちになった。彼は橋へと進み、何か言いかけて、私の腕をつかんだ。薄明かりの中、欄干の向こうが無いように見えた。彼は「おい、見ろ、俺がおかしくなったのか? 何てことだ、橋が無くなっている」等と叫んで、先の方を照らした。我々のいる所から20ヤードもない所で Slaveboy 橋は完全に流されていた。我々は黙ったまま橋の残骸を見、そしてお互いを見つめた。彼は「誰だ、合図を送ったのは? もし合図が無ければ - 」等と言い、急流を指差した。合図が無ければ、列車は猛スピードであの中に飛び込み、みんな命を落としていただろう。彼は「誰だ」と繰り返したが、私は首を振るだけだった。彼は列車へ戻り、「橋が流されました。運転士が停車したおかげで、全員助かったんです」等と乗客に興奮して伝えた。乗客は聞くと、自身で様子を見に行った。戻って来ると、私の手をしっかりと握り、援助を約束してくれた。私はぼうっと立ちつくした - 私が止めたのではないのだ。「線路を戻って調べよう、我々を救った人をひいてしまったかも知れない!」車両の下を調べたが、誰もいなかった。調べ終わると、検査官は

「急ごう。Dennistown に戻って Edmonton へ知らせるんだ。貨物列車が1時間後にここを通る予定だ」等と叫んだ。皆が調べている時、私は「誰だったんだ、Jack、何だったんだ?」とつぶやいていた。

「何だったのですか?」私(Grey)は Summers を見つめ、興奮して言った。「ああ、誰かって?」彼の目は寂しそうだった。「私は運転席に入った。Jack はまだ外だった。前を見ると、まだあの像が見える感じがしたんだ。そしてそれが何かわかったのさ。その蛾がヘッドライトの内側にいて、時々、羽をパタパタして、それが外の霧に黒く巨大な影として映ったんだ。外にいる人には話さず、ライトを開け、その蛾を取り出した。そして、列車を走らせ、Dennistown へ行き、橋の流失を伝え、Koolnay に帰った。私は急いで帰宅した。すると」彼の声は小さくなった。「Jenny は亡くなっていた、安らかな笑顔のままだった。私は適切な行動に対して援助と感謝状を受け取り、乗りたい列車を選べるようになった。だが、二度と運転しなかった。あの夜、私を家から引き離れた仕事だと思うと、心が大変痛んだのだ。放浪者となり、その焦げた蛾だけが話し相手だった。その蛾はライトの中にいた、彼女は見守ると約束してくれた - 」彼の声は次第に弱くなった。私は何も言わなかった。5分後、彼は微笑んで私を見、「私とその蛾を大事にしているのをもう不思議には思わないでしょう?」と優しく言った。

原作は著者による前書きがある(315頁)。

中国語訳では省略されている。紹介しておく。「ここに記す珍しい出来事は実際に起こったことである。Milwaukee and Waltham 線で、Pembina と Granite Bluff の間である。Menominee 川にかかる橋で、運転士の名は William Vanass、そして本作のように妻が病気になり亡くなったのである。」

ヘッドライトの中に入り込んだ蛾が影になって現れる時に、頭を必ず上にしていたので、人の形になったのである。少しでも斜めになったり、現れている時に、羽だけではなく、体ごと動いていれば、妻を心配し睡眠不足の運転士でも早々に気付いたであろう。なお、聞き役の Grey が何者かは言及が無い。

3

翻訳について述べる。他に訳されていた場合の原作探求の手掛りになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Grey	格雷
Bill Summers	別而 瑟模
Jenny	球南
Jack	及克
Canada	坎那大

書名について。原作は単純に「The Moth」(蛾)としている。一方、中国語訳は“披蘿帶荔”(つる草を身につけた隠者・(女)神)としている。“披蘿帶荔”は、戦国・楚・屈原《楚辞》離騷を典拠とした、清・蒲松齡《聊齋志異》聊齋自誌冒頭の4字で、書名により怪異譚であることを示している。原作とかけ離れ

た中国的翻訳で、今から見ると、読者にすぐ理解できるほど一般的な言葉だったのだろうかと思ってしまう。当時は民国初期であり、[文字が読める = 典故がわかるほど文化水準が高い]状況だったのだろう。

内容については、物語自体を変えてはいないが、主人公の現況を大きく変更し、全体にわたり、自由に改訳・加筆・省略を施している。大きく改訳している部分を見る。合図を送る巨大な影を初めて見た後の場面である。

Instinctively my fingers turned to shut off steam, then I stared again and drew a long breath - the figure was too large to be human, nor could anyone stand so long before our tearing onrush. With a glance at Jack, who was staring out steadily and quietly, I brushed my tired eyes and groaned.

I must knock off engine-driving, if my sleepless brain was to bring me these visions of the night.

But I ran her a little too easily across the stretch of flat, and Jack turned to look at me. Shole Hill was a long, steep gradient, and after we topped that there was a steep descent and a wide curve over the Slaveboy Bridge, with the river roaring in high flood against it.

“ See anything? ” Jack asked.
“ Better get up a bit for the hill,

eh? ”

“ I - it was a shadow, ” I said, uneasily, and let my beauty go again. Lord, how she flung herself at the black night, her head-lights nosing into the gloom as she tore along. (317 頁右-318頁左)

(本能的に私の指は蒸気を閉じる装置を回し、もう一度凝視し、長い息を吸い込んだ - 像は人にしては大きすぎるし、猛進する列車の前にそんなに長く立てる人もいないだろう。Jack をちらっと見ると、彼はしっかりと静かに外を見張っていた、私は疲れた目をこすり、うなり声を上げた。

もし寝不足の頭のせいでこんな夜の場面が現れることになったのなら、私は運転を止めなければならない。

しかし、私は平野を横切ってかなりゆるやかに彼女を走らせた。Jack は私の方を向いた。Shole Hill は長く急な上り坂があり、頂上に着いた後には急な下り坂と Slaveboy 橋を越える大きなカーブがあり、橋は水位が上がり大きな音を立てている川にかかっていた。

「何か見えたのか?」Jack は尋ねた。「丘に向かって少し速度を上げた方がいいんじゃないのか?」

「俺は - 影があった」私は言葉に詰まりながら言い、再び美しき彼女の速度を上げた。ああ、彼女が闇夜を突っ切る姿と言ったら! 彼女の疾

走と共にヘッドライトは暗闇の中を前進した。)

吾乃不寒而慄。氣息爲窒。以目眴及克。彼方凝神注視。略不稍瞬。似無動於中。吾再審視。即又不見。乃大懼。尋思不如遁去爲佳。則漸增吾車速率。及克覺之。顧謂吾曰：“別而。此蘇里山。方下坡。奈何反速。”吾不語。及克復曰：“前面距斯拉夫橋不遠。今若此。是增險也。豈別有用意乎。吾意不如徐行爲佳。”余曰：“彼處有一影。”然此語僅在吾喉中。輪聲如雷。及克固未聞。吾則仍使車徐行。既而下山矣。(13頁,句点は原文のまま,コロン・引用符は補った,以下同)

(私は寒くもないのに震え、息が止まった。及克の方を見ると、彼はじっと瞬きもせずに見ており、平気なようだった。私がもう一度よく見ると、見えなくなっていた。とても怖くなり、早く走り去る方がいいと思ったので、列車の速度を少しずつ上げた。及克は気付いて、私を見て「別而、蘇里山はちょうど下り坂だぞ。どうして速度を上げるんだ？」私はしゃべらなかつた。及克はまた「前方は斯拉夫橋から遠くない。今、この速度ならば、危険が増すぞ。何か他に考えがあるのか？俺は徐行した方がいいと思うよ。」私は「向こうに影があったんだ。」しかし、この言葉は私ののどに留まった。車輪の音が雷のようで、及克はもともと聞いて

ていなかった。私はそこで列車をゆっくり走らせた。まもなく山を下りた。)

止まれと合図する影を見たので、速度を下げたのである。翻訳は正反対に訳し、その場から逃げようと速度を上げたことにしている。後の検査官の台詞とも矛盾するので、そのまま訳すべきだと思う。また、省略・加筆も見られる。

もう1か所、大きく改めている部分を挙げる。影の真相がわかった後の最後の場面である。

“ Something prevented me from telling the crowd outside. I opened the light, took it out, and put it carefully away - the mystery was explained.

“ But my heart was heavy as I backed the engine up the hill and down to Dennistown, where we 'phoned to save the freight, then back to Koolnay with our tale of disaster and escape. The station was filled all night, wires flashing here and there, but I left them and ran home - and ” - Summers's voice grew very quiet - “ my Jenny was gone - peacefully - in her sleep. There was no trace of pain in her tired face, and she smiled as she had often done to welcome me home.

“ Driver Summers got his subscription and testimonial for

prompt action. I could have taken my pick of trains then. But I never drove the old engine, or any other, again. My heart was too sore with the duty which had taken me away that night.

“ I became a wanderer on the face of the earth, with only that scorched thing to keep me company. The moth was in the lamp, Grey, but - she promised to watch the run - ” His voice trailed away ; he got up, walking to the window. I said nothing.

Then, after an interval of quite five minutes, he turned to me with a quiet smile : -

“ You don't wonder at my keeping that moth now, do you? ” he said, gently. (323頁右)

(「私が外の人々に話そうとするのを何かが止めた。私はライトを開き、それを取り出し、注意深くしまった - 謎は解明されたのだ。

「しかし私の心は重かった、私は再び丘を上り、Dennistown へ下って行った、そこで我々は貨物列車を救うために連絡した、それから災害と回避の話を持って Koolnay に帰った。駅は一晩中いっぱい、電信があちこちへニュースを速報していた、しかし私は彼らを放っておいて急いで帰宅した - すると」 - Summers の声はとても小さくなった - 「我が Jenny は亡くなっていた - 安らかに

- 眠っている間に。彼女のやつれた顔には苦しんだ跡は無く、私の帰宅を迎えるためにいつも見せてくれていた笑顔だったよ。

「Summers 運転士は機敏な行動に対し援助と感謝状を受け取った。それから私は好きな列車を選べるようになった。だが、私は古い機関車を、その他のどれもだったが、もう二度と運転しなかった。あの夜、私を家から引き離れた仕事だと思うと心が大変痛んだのだ。

「私は地球の放浪者となった、その焦げた奴だけが私の話し相手だった。その蛾はランプの中にいたのだ、Grey、だが - 彼女は見守ると約束してくれた - 」彼の声は次第に弱くなった ; 彼は立ち上がり、窓の方へ歩いた。私は何もしゃべらなかつた。

そして5分の間を置き、彼は私の方を向き静かに微笑んで : -

「私がその蛾を大事にしていることをもう不思議には思わないでしょう? 」と優しく言った。)

於是吾乃啓燈後小門。取此蛾出。謹藏之。此神祕遂揭曉。然余之心事。不爲稍減。既至鄧尼斯發電。遂遄歸壳而内。以瑣事屬及克。狂奔而歸。入門時。中心忐忑。呼吸窒而不通。寒風瑟瑟。鬼影憧憧。覺吾室何寂如墟墓。球南吾愛。汝若去者。煩於地下先驅狐狸。吾亦踵至也。徐徐以鑰關門。推而入。見球南仰臥榻上。漸近之。彼以目瞬吾。媯然而笑。如渠

他日之歡迎吾歸。感謝上帝。吾同命之球南。乃無恙也。

別而述此事既竟。乃欣然作得意狀曰：“格雷君。可知吾任之何處。必以此蛾自隨爲何意矣。是役也。車中坐客歸功於吾。爭出金錢爲酬。而公司亦獎吾以金牌。於是吾得大宗款項。且獲極難得之榮譽也。”(16頁下-17頁下)

(そこで私はライトの後ろを開き、その蛾を取り出し、注意深くしました。この神秘的な出来事はすぐに発表した。しかし私の心配は少しも減らなかった。鄧尼斯に到着すると電報を打ち、すぐに売内へ戻った。細々した事は及克に任せ、急いで帰宅した。門を入る時、気持ちは落ち着かず、呼吸は止まらんばかりだった。冷たい風が吹き、幽霊の影がちらつくようで、我が家は荒れた墓のように何とも寂しかった。我が愛する球南、もしお前が亡くなって、先に地下で狐を追い払うのに煩っているようならば、私も後を追って行くぞ。ゆっくりと鍵を開け、ドアを開けて入った。球南がベッドに寝ているのが見えた。少しずつ近づくと、彼女は私にウインクし、にっこり笑った、私の帰宅を迎えるこれまでの時と同じだった。神に感謝します。死ぬ時は一緒と誓った球南は無事だったのだ。

別而は話し終わると、うれしそうに得意気になって「格雷君、どこへ行くにも、私とその蛾を伴って行く

のがなぜかおわかりだろう。こういう出来事だったのだ。列車の乗客は私のお手柄だと言って、競うように報酬のお金を出してくれた。また会社も私を表彰し金メダルをくれた。私は大金を手に入れ、大変に得がたい榮譽をいただいたのだ。)

翻訳は冒頭315頁右の Summers の紹介の「a born wanderer」(生まれながらの放浪者)を訳しておらず、この最後の「wanderer」も訳していない。また、Jenny(球南)も生きており、アフリカにいる現在と全くつながらない。理由のわからない不思議な改訳である。

4

剥製にされ大事に保存されている蛾にまつわる話で、主人公 Summers の人生を変えてしまった一夜の物語である。列車を止めた所が、流失した橋の手前というクライマックスに向けて盛り上がっていくわかりやすい内容が気に入られたのであろう、原作発表から2年経たないうちに翻訳されている。ただ、翻訳はしっかりしているとは言えず、特に最後の Jenny が亡くなっていたという原作の切ない感じが、台無しになっているのは残念である。

現在では顧みられることの無い翻訳短篇の原作を解明しただけであるが、これまで誤ったまま伝わってきた原作者2人の名を訂正しただけでも本稿の意味はあると思う。 罫

【注】

- 1) 扉頁裏に「Copyright, 1903, by LONGMANS, GREEN, AND CO.」 「First Edition, June, 1903」等とあり、冒頭に Emily Hawtrey の「Preface」がある。その内容から、Mrs. H. C. Hawtrey = Emily Hawtrey とわかる。
- 2) 『The Oxford Companion to Edwardian Fiction』76頁は「1869」、 『Who Was Who in Literature,1906-1934』246頁は「1873」とする。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》
浙江古籍出版社,1993年5月

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》
中華書局,1997年2月

Sandra Kemp, Charlotte Mitchell, David Trotter 『The Oxford Companion to Edwardian Fiction』 Oxford University Press, 2002年(- First published in hardback as Edwardian Fiction : An Oxford Companion 1997)

『Who Was Who in Literature, 1906-1934』 Gale Research Company, 1979年

William G. Contento 管理 HP 「The Fiction Mags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2013年10月9日確認)

Internet Archive HP 内
<http://archive.org/details/shorthistoryofge005173mbp> (2013年10月9日確認)

London Borough of Hillingdon HP 内
<http://www.hillingdon.gov.uk/media>

[jsp?mediaid=25334&filetype=pdf](http://www.sports-reference.com/olympics/athletes/ha/henry-hawtrey-1.html)
(2013年10月9日確認)

Sports Reference LLC 管理 HP 「SR/Olympic Sports」
<http://www.sports-reference.com/olympics/athletes/ha/henry-hawtrey-1.html> (2013年10月9日確認)

『中国現代文学研究叢刊』
2013年第9期(総第170期) 2013.9.15
梁啓超の兩次“归来”与五四新文学
.....張 弛

“新文学之始基” 從小説創作看蘇曼殊的文学史意義閻曉昀

【書評】讀《填平雅俗鴻溝 范伯群學術論著自選集》朱静宇

張元濟研究会、張元濟図書館編
『張元濟研究論文集』
北京・中国文史出版社2009.8

紀念張元濟先生誕辰140周年暨第三届學術思想研討會論文集
商務印書館与上海楊 揚
堅持印刷出版同步發展的張元濟.....錢普齊
商務印書館与小説劉德隆
散論張元濟对《東方雜誌》的影響...洪九来
《小説月報》与商務印書館柳 珊
商務印書館《高等小学堂用最新国文教科書》
簡析張人鳳
商務印書館商標的變遷 以張元濟図書館館藏商務版書籍為例凌 晨

早期漢訳ドーデ「最後の授業」1

胡適訳「最後一課」のばあい

神田 一三

はじめに

表題に「早期」とつけるのは、1910年代、中華民国になって早々に公表された漢訳2種をあつかうからだ。訳者は、胡適、黄静英である。それ以外は、本稿の対象にしていない。ご了解いただきたい。

早期の漢訳だからか、それとも「胡適思想批判」の後遺症がまだかすかに残っているのか。漢訳そのものを検討した論文は、少ないように見受けられる。それでも胡適訳「最後一課」を取り上げる政治論文は近年に数が増えている。とはいえ、数の多さが論文の質的向上に貢献しているかどうかは別問題だろう。だいいちドーデの原作そのものが、根底に大きな問題をかかえているのだから。あとで説明する。

胡適漢訳からはじめる。

問題を着想する 林紘批判との関係で

胡適(1891-1962)は、英語ができた。そればかりか、彼はフランス小説を漢訳している。ドーデ「最後の授業」だ。その胡適が、外国語を知らない林紘(琴南)の翻訳を批判した。外国語を理解する胡適が、林訳小説を非難攻撃するのも理由のないことではない。そう考えられてきた。

そこでつぎの疑問が浮上してくる。

外国語ができない、と林紘を攻撃した胡適なのだ。林訳は原作にもとづかないでたらめな翻訳だといっているのとかわらない。では、胡適が翻訳したドーデ「最後一課(最後の授業)」はどのようなものなのか。胡適の漢訳は、林訳を批判するだけの内容をそなえているのか。それを検証するのが、本稿の目的である。胡適の林訳批判をふまえて、彼の漢訳そのものに注目する。

ドーデの作品に入る前に確認しておきたいことがある。

胡適が展開した林訳小説批判から話をはじめよう。彼の翻訳観を知るために必要だ。胡適の漢訳について知りたい人は、本稿内の「胡適訳「最後一課」」からご覧ください。

胡適の林訳小説批判

胡適は、陳独秀を先頭にした文学革命派の主要構成員のひとりだ。陳独秀は、1918年当時、北京大学文科学長(今でいう学部長)である。

胡適がアメリカ留学中に執筆した「文学改良芻議」は、陳独秀の主宰する『新青年』第2巻第5号(1917.1.1)に掲載された。翌号の『新青年』に陳独秀が「文学革命論」を発表する。こうして文学革命運動がはじまった。1919年の五四事件以前に発生した文学潮流のひとつだ。

胡適は、林訳小説に対していかなる評価をあたえたか。

ひとつは、劉半農が林紘、魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』(商務印書館1904。以下『吟辺燕語』と称す)を批判したとき、それに便乗した。あるいは、追隨追認した。

王敬軒の投書とそれに対する劉半農の返答だ。王敬軒は実在しない。錢玄同が架空の人物王敬軒になりすまして文書を捏造した。『新青年』雑誌を舞台にくり広げられた。あの有名な「なれあい芝居(双簧戯。手紙だから双簧信)」である。

胡適は、彼らの直後に登場する。そしてなにをいったか(傍線圏点省略)。

林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳した！これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人である。

林琴南把 Shakespear^{ママ} 的戯曲，訳成了記叙体的古文！這真是 Shakespear^{ママ} 的大罪人*1

胡適は、王敬軒(錢玄同)および劉半農とともに大きな誤りを犯した。そういわざるをえない。

林訳『吟辺燕語』は、シェイクスピアの戯曲そのものではない。ラム姉弟の『シェイクスピア物語』が底本であるからだ。小説を漢訳して小説になるのは当然だ。劉半農の行なった批判そのものが、成立しない。

「これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人である」胡適が書きつけたこの字句は、動かすことも抹消することもできない。胡適が根拠もなく林訳小説を批判した証拠として今に残っている。

同文においてもうひとつ私が注目する箇所がある。

胡適は、西洋の文学書を翻訳することについてふたつの提言をしている。要約する。

1 名家の著作だけを翻訳し、第2流以下の著作は翻訳しない。(筆者注：第2流以下とは、ハガードの類を指す)

2 全面的に白話を用いる。韻文の戯曲もすべて白話の散文に訳す。

胡適は、林紘冤罪事件に加担した。その彼が翻訳したフランス小説とは、どういうものなのか。胡適の提言にしたがえば、名家のすぐれた著作(名著)でなくてはならない。だが、胡適は、嘘を論拠にして林紘を非難した人だ。その人のフランス小説翻訳は、だいじょうぶなのか。

新 青年
(第四卷第四號)
三〇六

怒拂袖而起。不知道這位偵探穿的，是不康橋大學的廣袖制服！——這樣譯書，不如不譯。又知林琴南把 Shakespear 的戯曲，譯成了記叙體的古文。這真是 Shakespear 的大罪人，罪在圓室案譯者之上。

(三)創造。上面所說工具與方法兩項，都只是創造新文學的預備工具。用得純熟自然了，方法也懂了，方才可以創造中國的新文學。至於創造新文學是怎樣一回事，我可不敢開口了。我以為現在的中國，還沒有做到實行預備創造新文學的地步，儘可不必空談創造的方法和創造的手段，我們現在且先去努力做那第一第二兩步預備的工夫罷！

(完)

360

『新青年』「シェイクスピアにとっての大罪人である」

議論の中心は、林訳小説をめぐってのものだ。

王敬軒(錢玄同)が林紘を当代の文豪と賞賛する。その根拠のひとつに林訳『吟辺燕語』をかかげる。劉半農がそれに反論して強烈に批判する。シェイクスピアの戯曲を小説という形にかえて漢訳した。非難嘲笑して、豆と麦の区別がつかない、と林紘を罵る。基礎的な知識もない、と嘲罵する中国の慣用句だ。

讀者論壇

孟樸先生：
前奉上一書，想已覽。近日因小病，不能作工，頗得餘暇，遂重讀
惠贈的歐戰戲劇三種。讀後更覺孟先生的志願與精神之不可及。中國
人能讀西洋文學書，已近六十年了；然名著譯出的，至今還不滿二百
種。其中絕大部分，不出于能直接讀西洋書之人，乃出于不通外國文
的林琴南，真是絕可怪詭的事！近三十年來，能讀英國文學的人更多
了，然英國名著至今無人敢譯，這得讓一位老輩伍昭辰先生出來翻譯



讀者論壇

を賞賛)……私はここ12年間フランス語の文学書を読まなくなっています。ユゴーの戯劇も研究したことはありません。貴訳につきましては、賞辞を呈する資格もまったくなく、ただ畏敬し賞嘆するばかり、……

中国人能讀西洋文学書，已近六十年了；然名著訳出的，至今還不滿二百種。其中絕大部分，不出于能直接讀西洋書之人，乃出于不通外国文的林琴南，真是絕可怪詭的事！……(中略)……我十二年不讀法文文学書了，囂俄的戯劇向來更無研究，對於尊訳，簡直是不配賞一辞，止有敬畏賞嘆，…
… 1-2頁

『真美善』

信頼できるのか。

曾孟樸へあてた胡適の手紙

本稿を書く動機となったもうひとつの文献がある。

病夫(曾孟樸)「復胡適的信」だ。雑誌『真美善』の「讀者論壇」*2に掲載された。胡適からの手紙を曾孟樸が紹介する。胡適は、そのなかで次のように書いている(傍線省略)。

中国人が西洋の文学書を読むことができるようになって、すでに60年になろうとしています。しかし、名著で訳出されたものは、いままでまだ200種に満たません。その中の大部分は、西洋書を直接読むことのできる人によって出されてはならず、外国語に通じない林琴南によって出されています。まことにもって奇怪なことです！……(中略：現在の訳本について説明。曾孟樸の漢訳ユゴー戯劇全集

胡適が『新青年』で林紓を「シェイクスピアにとっての大罪人である」と罵ったちょうど10年後の意見表明だ。

短文ながら、いくつかの事項について説明が必要だと考える。

「60年」というのは、どこらあたりの外国作品をいうのだろうか。宣教師によるキリスト教関係書籍の漢訳は除外する。

見れば、1872年の『申報』に、スウィフトSwift「談瀛小録」、アーヴィングIrving「一睡七十年」、マリアットMarryat「乃蘇国奇聞」がある。また、同年『瀛寰瑣紀』には、リットンLytton「昕夕閑談」が連載されている。それらの作品を指しているとすれば、56年前のことになる。60年に近い。

「名著」がなにを指すのか不明だ。ただ、ハガードの冒険小説、ドイルの探偵小説などは含まない。胡適自身が、明らかにそう書いていた。

曾孟樸の息子虚白が編集した(曾)虚白原編「中国繙訳欧美作品的成績」*3がいい例だ。ハガード、コナン・ドイル、ルブランなど3流4流の作家は意識的に排除してある、遺漏ではない、と言明している。鄭振鐸も同じことをいった。

胡適が考える名著には、彼が翻訳したドーデとモーパッサンなどは含まれているだろう。そうでなければ胡適は漢訳しなかったはずだ。

それにしても、「200種」というのは、少ないような気がする。名著というワクをはめたからか。

商務印書館が刊行した外国小説の翻訳シリーズ「説部叢書」がある。こちらには、ハガードもドイルも含んでいるが200種以上は軽く数えることができる。第4集第22編が1924年に出た。これで完結だ。初集本(元版は除く)を数字の上からだけ見ても、1集100種だから少なくとも322種になる。

林訳小説の最初は、小デュマ Dumas fils 『巴黎茶花女遺事』の刊行が1899年だった。『申報』のスウィフトよりも27年遅れる。胡適は林紘を批判して外国語ができないという。胡適の視野においては、林訳小説は邪魔物でしかない。

胡適は曾孟樸にあてた手紙のなかで林訳小説を非難しているのだ。外国語を理解しない林紘だと嘲笑もする。ならば、胡適自身は外国作品を翻訳するにあたって、原文主義、直訳主義に立脚しているだろう。当然、原意を尊重した逐語訳にちがいない。誰でもそう考える。胡適自身は、この手紙のなかで直接には書いていない。だが、読者がそう考えるように誘導している。

手紙を読めば、胡適のいらだちが感じられる。

翻訳名著は「200種に満ちません。その中の大部分は」「外国語に通じない」林紘が翻訳したという。ならば、ハガードやドイルなどを除いたそれ以外の林訳作品は、名著の範囲内にはいってしまうではないか。林紘は、外国語を知らないで名著を多数翻訳している。胡適にとっては、ここが腹立たしい。結局のところ、胡適は、原文から直接に翻訳しない林紘の方法を批判している。だからこそ、私はなおさら胡適の翻訳に注目してしまう。

胡適がフランス語の文学書を読まなくなって「12年」というのは、なにを意味するか。

この手紙の日付は、1928年2月21日だ。1928年から12年を減じると1916年になる。

胡適が漢訳したドーデ作品の公表は1912年、および1914年だ。同じくモーパッサン作品は1917年と1919年になる。

そこを見れば、ドーデ作品までは胡適はフランス語で読んだといっているのと同じだ。ドーデ作品がフランス語原文ならば、モーパッサン作品も同様だろう。そう思わせるように書かれた胡適の手紙だ。

胡適の文章から導きだせる結論はこうだ。胡適は、ドーデ作品をフランス語原文から漢訳した。

林訳は誤訳、省略が多いとも批判されている。ならば、胡適漢訳は、それらとは無縁のはずだ。フランス語原文により、厳密に直訳して省略はないだろう。そう予想される。

しかし、実際に彼の漢訳と読むと、かなりあやしい。かなりどころか……。説明しよう。

漢訳ドーデ「最後の授業」

ドーデ (Alphonse Daudet, 1840-97) の「最後の授業 LA DERNIÈRE CLASSE」(『月曜物語 Contes du Lundi』1873収録)である。

該作品について過去の日本における評価は、一般にいつて次のようだろう。日本語訳者桜田佐が「解説」に書いている。

「幼な心に映じた敗戦国の悲哀と愛国の熱情を描いた名編として、早くからわが国の少年読物にも紹介された」(299頁)

簡潔にまとめられている。「敗戦国の悲哀と愛国の熱情」わかりやすい。広く引用される理由だ。

中国においても、似たようなものだ。

おおよそを知るために『中国大百科全書・外国文学』*4から引用翻訳する。

「最後の授業(最後一課)」と「ベルリン包圍(柏林之圍)」は、ふたつとも人

口に膾炙した名作だ。「最後の授業」は世界各国の言語に翻訳され、小中学生の国語教材に常に選ばれており、中国にも翻訳がある。小説はプロシアがフランスに戦勝したのちアルザスとロレーヌ両省の併合を強行した事件を背景にしている。ひとりの小学生がフランス語最後の授業において見聞し心を感じたことを通じて、フランス人民の深く厚い真摯な愛国の感情を深く表現している。譚立德執筆262頁

中国のばあい、上のような大型出版物は権威となる可能性が高い。その評価が固定し、別の方向に動くことは、あまりない。今後も、ドーデ作品は、「フランス人民の深く厚い真摯な愛国の感情を深く表現している」と書かれつづけるだろう。

専門家の説明も見るが、大同小異だ。

郭延礼は、こういう。「最後の授業」と「ベルリン包囲」は、もっとも著名で、深く厚い真摯な愛国の情熱にあふれた小説である*5。

『中国大百科全書・外国文学』の説明をかいつまんでほとんど同文ではないか。

韓一宇は、こういう。ドーデは「最後の授業」によって中国人の心のなかでは愛国主義作家の代名詞になっている*6。

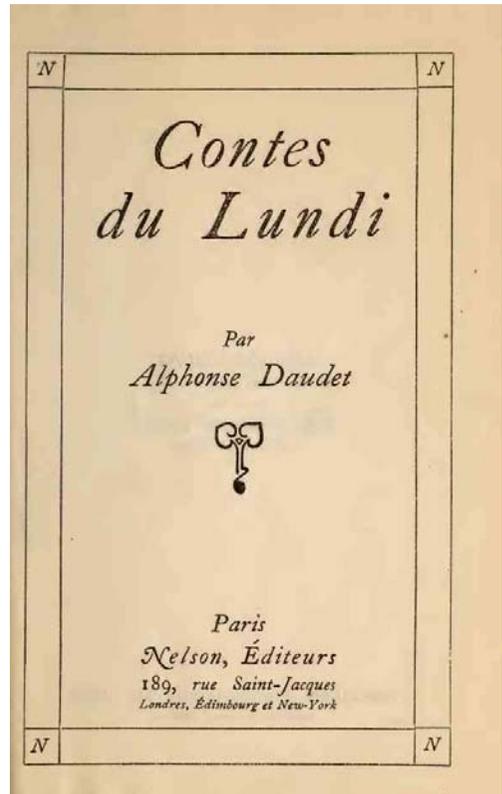
過去の日本と中国では、ドーデ作品の評価について共通の認識があるといっている。

胡適は、そういう作品をどのように漢訳したか。ドーデ原作は、まさに短篇小説だ。いろいろ手を入れる余地はあるのか。

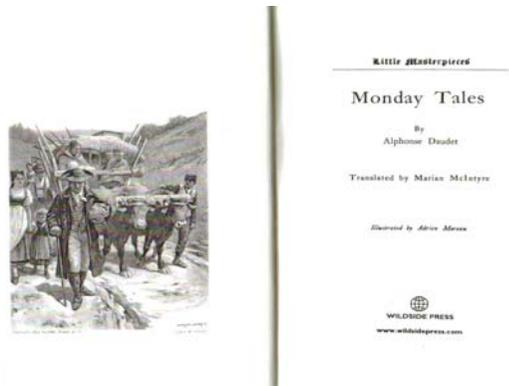
胡適訳「最後一課」の底本を特定するために

本稿において、胡適白話漢訳ドーデの底本を追求する。以下の版本を使用した。

1 フランス語原本：Alphonse Daudet. “La dernière classe” *Contes du Lundi*. Paris: Nelson, Éditeurs, 1873. 電字版



1 1873 フランス語原本 電字版



2 1900 マッキンタイア英訳 影印本

2 英語重訳マッキンタイア英訳: Alphonse Daudet 著、Marian McIntyre 英訳 “ THE LAST LESSON ” *Monday Tales*. BOSTON: LITTLE, BROWN, AND COMPANY, 1900. 影印本

3 英語重訳レイノルズ英訳: Alphonse Daudet 著、Francis J. Reynolds 英訳 “ THE LAST LESSON ”, *INTERNATIONAL SHORT STORIES : VOLUME (FRENCH)*, NEW YORK: P. F. COLLIER & SON COMPANY, 1910 影印本、電字版

4 日本語訳: ドーデー作、桜田佐訳「最後の授業」『月曜物語』岩波書店1936.2.10 / 1989.1.5五十二刷 岩波文庫

5 胡適漢訳: 都徳著、胡適訳「最後一課 (La Dernière Classe)」『短篇小説』第一集 上海・亜東図書館1919.10初版 / 1929.8重排十三版 / 1920.5十四版 / 1931.6十五版

6 胡適漢訳: 都徳著、胡適訳「最後一課」『胡適訳短篇小説』長沙・岳麓書社1987.7。あるというだけ。

参考に次も見。別の英訳本だ。

7 George Burnham Ives アイヴス英訳 “ The Last Class ” *Alphonse Daudet's Short Stories*. New York and London: G. P. Putnam's Sons, 1909. 電字版。これは、つぎのハーヴァード英訳本と同文だ。

8 Alphonse Daudet. “ The Last Class The Story of a Little Alsatian ” (Five short stories, by Alphonse Daudet. *THE HARVARD CLASSICS SHELF OF FICTION*, VOLUME XIII, PART 4. FRENCH FICTION. New York: P. F. Collier & Son, 1903 / 1917. 電字版)。刊年を見れば、アイヴス英訳よりも早いように見える。ただし、どうしてだかハーヴァード英訳には英訳者の名前が見えない。本稿では、参照用にアイヴス英訳を使用する理由である。参考までに、同名同文、英訳者不記が “ THE NEW YORK TIMES ” 1914年8月23日付に掲載されている(ウェブで確認)。

また、ドーデーの漢訳本で新しい次の本がある。

9 (法)阿爾封斯・都徳著、劉方訳「最後一課」劉方、陸秉慧訳『都徳小説選』北京・人民文学出版社2010.1

なぜこれほど多種類の文献をかかげる必要があるのか。読者は疑問に思われるかもしれない。胡適は、フランス語原文から漢訳したのだ。英訳がなぜここに出てくるのか。

胡適漢訳の底本を特定する。そのためには、これらのうちひとつでも欠けては、吟味するという作業が実行できない。

胡適はフランス語原文から漢訳したと書いている。あるいは、そのように読める。先走りしていえば、作品題名に「最後一課 (La Dernière Classe)」とフランス語を併記する。誰がみてもフランス語原文にもとづいて翻訳したと思う。だが、漢訳そのものを見ると、ますますあやしい。

先行論文を読んでも、底本がフランス語なのか英語重訳なのか、はっきりしない。中国人研究者の興味を引かなかつたらしい。奇妙なことだと私は感じる。確認する必要がある。フランス語原文のほかに、いくつかの英訳がすでに存在している。そのなかのどれであるかも、指摘することになるだろう。

というわけで参照文献がふえた。

胡適訳「最後一課」

胡適がアメリカ留学中に考えた翻訳題名は、最初は「割地」だった。

胡適『胡適留学日記』第1冊*7には、以下のように記述される(傍線省略)。

1912.9.29 / 九月廿九日(星期一)

夜訳割地(即最後一課)成。寄徳争, 令戴之大共和。

カッコ内に「即最後一課」とした注は、最初からそう書いていたと思われる(後述)。底本

についての記録はない。

原題が「最後の授業」だ。わざわざ改題して「割地」つまり領地割譲とした。胡適が翻訳した当時は、その方が原作内容をより適切に表現していると考えたためだろう。ここでは、翻訳をしたのは1912年だと留意しておく。アメリカにいる胡適から中国をながめれば、自分があとにした清朝が崩壊し、見も知らぬ中華民国が成立した時期である。

日記にある徳争は、『競業旬報』に作品をいくつか掲載している。葉姓という*8。

「大共和」は、上海の日刊紙だ。胡適はアメリカから上海の新聞に投稿した。のち、転載改題されて以下のような経過をたどる。

(法) 都徳著 胡適訳「割地」

『大共和日報』1912.11初旬

同「(短篇小説) 割地」

『留美学生季報』2巻1期 1915.3*9

同「最後一課 (La Dernière Classe)」

『短篇小説』第一集 上海・亜東図書館1919.10初版

単行本の『短篇小説』は長年にわたり重版をかさねた。21年間に21回の重版という。平均して1年に1回の再版をくり返した。1版の部数は不明だ。とにかく『短篇小説』だけでも広く読まれたことがわかる*10。

漢訳作品「最後一課」は、教科書に採用されたという。その認知率はかなり高いといっていだろう。

胡適漢訳の検証 フランス語原文か英語重訳か

胡適の漢訳を検討することから始める。それが基本だ。胡適がアメリカ留学中にドイツ語、フランス語を学習したしない、といったところで手がかりにはならない。『短篇小説』に収録した時、最初の訳名「割地」を改題し「最後一課」にした。その際、原題のLa Dernière Classe

を追加している。いかにもフランス語原文から漢訳したように見える。だが、鵜呑みにすることは危険だ。

結局のところ、胡適が使用した底本については、原作と訳文を比較対照することでしか明らかにはできないだろう。

本稿において基本的な記述の順序は、フランス語、その日本語訳、英語、胡適漢訳だ。胡適漢訳には日本語訳をつける。煩雑なように見えるか。だが、この手続きを踏まなければ底本を決定することができない。ご了解いただきたい。

フランス語原文の“LA DERNIÈRE CLASSE”は、マッキンタイアに英訳されて“THE LAST LESSON”になった。レイノルズ英訳も同じ。別のアイヴス英訳は“THE LAST CLASS”とする。意味は同じだ。だが、標題に使用した単語が違うし本文の細部も異なる箇所がある。前2者の“THE LAST LESSON”を使う。必要に応じてほかの英訳を示す。

最初の題名「割地」は、おいておく。本稿では、「最後一課」を使用する(本文を引用する時は、傍線省略。なお、日本語は上記桜田訳を示す。傍点、ルビは省略)。

フランス語原文には副題がついている“RÉCIT D'UN PETIT ALSACIEN”。「アルザス人の一少年の物語」だ。マッキンタイア英訳も“A YOUNG ALSATIAN'S NARRATIVE (ある若いアルザス人の物語)”だからほぼ同じ。ただし、レイノルズ英訳は、副題がない。別の英訳2種は、ともに“The Story of a Little Alsatian (ある少年アルザス人の物語)”となっている。

胡適は、この副題を削除する。最初から、つまり。胡適の判断による削除かどうかはわからない。なにしろ、本稿で主として使用する英訳だけで2種類がある。参考にするものも複数が存在するからだ。レイノルズ英訳には副題がないことを記録しておく(証拠1)。

話し手の少年が通う学校にはフランス語教師

アメル先生がいる*11。ドーデが意図しているのはフランス人だ。本小説の主人公である。フランス領アルザス地方に住む少年の目を通して物語は展開していく。小説の主眼は、このアメル先生の言動を書き留めることだ。

M. Hamelである。M. はMonsieurのこと。氏にあたる。英訳は、Monsieur HamelあるいはM. Hamelにする。

フランス語はHを読まない。だから日本語カタカナで表記すればアメルがその発音に近い。

胡適は、訳して漢麦先生と漢字をあてた。奇妙である。「漢麦」ではハメルとなり英語読みになる*12。現代の劉方は「阿邁爾(アメル)」と漢訳する。フランス語読みとしては、これが正しい。

学校で先生からフランス語文法の質問がある。

質問というのが、分詞(participes / 英訳 participles) についてのものだ。胡適は「動静詞」と漢訳した。意味がわかりにくい、と郭延礼はいう。だが、動静詞という文法用語は、日本の19世紀江戸時代には存在している。『諳厄利亜語林大成』(1814)だ。現在分詞、動名詞の意味だという。ただ、現在は使っていないだけのこと。当時の英漢字典には「分詞、中言、両用詞」と訳語がついている。こちらを使用してもよかった。どのみち誤訳というほどのことはない。

フランス語文法をおぼえていない少年は、どこかへ逃げようかとも考える。それほどに、いい天気だ。

On entendait les merles siffler à la lisière du bois, et dans le pré Rippert, derrière la scierie, les Prussiens qui faisaient l'exercice. p.11

森の端でつぐみが鳴いている。リペールの原っぱでは、木びき工場の後でプロシア兵が訓練しているのが聞こえる。11頁

【マッキンタイア】The blackbirds were whistling on the outskirts of the woods. In Rippert Meadow, behind the sawmill, the Prussians were drilling. p.1

【レイノルズ】The birds were chirping at the edge of the woods; in the open field back of the saw-mill the Prussians soldiers were drilling. p.337

【胡適】那邊竹籬上，兩個小鳥兒唱得怪好聽。野外田裏，普魯士的兵士正在操演。2頁

むこうの竹垣には23羽の小鳥がとても気持ちよく鳴いている。野外の畑ではプロシア兵が演習をしている。

フランス語原文とマッキンタイア英訳に共通して出現する、森の端、つぐみ、リペールの原っぱ、製材工場がある。レイノルズ英訳は、それと異なり、つぐみとリペールがない。同じ英訳といっても細部が違う。その違いが胡適漢訳にはどう反映されているか。

胡適漢訳には、つぐみもリペールもない。レイノルズ英訳に近い(証拠2)。もとが短篇小説だ。ただでさえ短い文章を、漢訳でさらに短縮する意味はあるのか。おまけに、竹籬(竹垣)は、胡適による書き換えだ。

役場の掲示板には、多くの人がむらがっている。2年前から悪い知らせは、ここからやってくる。「今度はなんだろう」

弟子と一緒にいた鍛冶屋のワシュテルが、私(語り手の少年)に呼びかける。急がなくても学校には遅れっこないぞ。私をからかっているのだと思った。

胡適漢訳は、鍛冶屋のワシュテル部分を削除する。ワシュテルからの呼びかけは、学校に異変が生じていることを示唆している。周囲の人々は知っているのだ。しかし、語り手の少年はそれを知らない。そこを削除しては物語に起伏が乏しくなってしまう。胡適は、その必要を

認めなかったらしい。

授業のはじまりは、いつも大騒ぎのはずだ。机を開けたり閉めたり、大声をあげたり、先生が大きな定規で机をたたいて、静かに、と叫ぶ。

la grosse règle du maître qui tapait sur les tables :

《 Un peu de silence ! 》 p.12

先生が大きな定規で机をたたいて、『も少し静かに！』と叫ぶのが、……

12頁

【マッキンタイア】the master's big ruler would descend upon his desk, and he would say,

“ Silence ! ” p.2

【レイノルズ】the teacher's great ruler rapping on the table. p.337

【胡適】先生鉄戒尺的声音 3頁
先生の鉄の懲罰板の音

胡適漢訳には、机をたたく、がない。また、「静かに！」という先生の声もない。そこは、レイノルズ英訳に近い。ただし、胡適が勝手に省略したのかもしれない。証拠とするには弱い。

懲罰板が鉄というのが、奇妙な訳語だ。普通は板でできている。しかし、胡適によるとアメル先生が持つのは鉄製になる。中国の教師が使うのは細長いしなう板である。教鞭だ。罰して普通は子供の手のひらを打つ。ひどいときは尻を打つ。それからの連想かと思う。原文とは違う。

原文は大きな定規だ。胡適は、のちの場所で「鉄の」定規とあるのを先取りしたらしい。だが、ここで打つのは机であり、生徒の手のひらではない。胡適はそこまでは書いていない。どちらにせよ、この「鉄戒尺」は中国化させたものだ。なにしろ鉄の懲罰板なのだから。フランス語原文およびマッキンタイア英訳、レイノルズ英訳から離れている。

文学革命派のひとりである胡適は、漢訳『圓室案』(林訳ではない)に出てくる英国人の主人公が中国風の衣裳を着ていると批判した。その胡適が、定規を懲罰板に書き換えて同じことをしている。他人を打つことばが、同時にそのまま胡適自身を射る。

少年は先生から怒られるものと恐れていた。だが、先生は席につくようにとやさしくいう。

Va vite à ta place, mon petit Frantz ; nous allions commencer sans toi. p.13

早く席に着いて、フランツ。君がいないでも始めるところだった。12頁

【マッキンタイア】Take your seat quickly, my little Franz. We were going to begin without you. p.3

【レイノルズ】Go to your place quickly, little Franz. We were beginning without you. p.338

【胡適】孩子快坐好，我們已要開講，不等你了。3頁

早く坐って、君をまたずに始めるところだ。

主人公の少年は、フランツ (Frantz / 英訳 Franz。別訳はそのままFrantz) という名前である。読者にそれが知らされる瞬間だ。ところが、胡適は翻訳していない。別の箇所にもフランツは出てくる。胡適は、それらをすべて無視した。

副題になっているアルザス人の少年なのだ。語り手の名前を漢訳しない理由はなにか。胡適は、説明しない。 罫

【注】

- 1) 胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号1918.4.15
- 2) 病夫(曾孟樸)「復胡適的信」『真美善』第1巻第12号1928.4.16
- 3) (曾)虚白原編「中国繙訳欧美作品的成績」『真

- 美善』第2巻第6号1928.10.16
- 4) 『中国大百科全書・外国文学』北京・中国大百科全書出版社1982.5 / 1985.3四次印刷
- 5) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3. 474頁 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。381頁
- 6) 韓一字『清末民初漢訳法蘭西文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6. 105頁
- 7) 胡適『胡適留学日記』第1冊。台湾商務印書館1947.11本館第一版 / 1959.3本館台一版。柱は「葺揮室筭記」。97頁
- 8) 韓一字「都徳《最後一課》漢訳及其社会背景」『文藝理論と批評』2003年第1期(総第99期)2003.1.24。140頁で葉徳貞、徳徴で出てくる。また、次が比較的詳しい。Jack Rubbish「胡適早年交遊考(一部分)」胡適網上讀書会 第53期2012.6 電字版
- 9) 韓一字によると、当時の総編輯は胡適の友人任鴻雋(韓一字「“陳匪石訳”《最後一課》与胡適訳《最後一課》考略」2002。162頁。韓一字論文については後述)。張偉「《最後一課》漢訳溯源」『塵封的珍書異刊』天津・百花文藝出版社2004.1 / 2004.7第二次印刷。146頁に本文冒頭の写がある。胡適「論短篇小説」のなかで「最後一課」に割り注して次のように説明する。「初訳名『割地』, 登上海大共和日報, 後改用今名, 登留美学生季報第三年」(『短篇小説』第一集161頁)。題名について胡適自身が記憶違いをしている。『留美学生季報』は「割地」のまま。「最後一課」に改めたのは『短篇小説』第一集に収録した時だ。
- 10) 目録によると、1936.2二十版が出ている。鈴木正夫は同じく1936年2月発行の第二十版を確認しているという。鈴木「ドーデ『最後の授業』の日本と中国における受容について—そして魯迅「藤野先生」」『横浜市立大学論叢』第44号人文科学系列第1・2合併号 金子博教授・羽鳥重雄教授退官記念号1993.3.30。148頁注5において次のように書く。「他の複数の資料によって19年10月の初版は間違いのないと思われるが」までは正しい。だが、つづく「その時点では題名は「割地」であった模様である」は、間違いだろう。単行本に収録するにあたり「最後一課」に改題したのが事実だ。また、『胡適訳短篇小

- 説』「出版説明」2頁に1940年二十一版とある。本稿注の前出張偉「《最後一課》漢訳溯源」も、1940年で二十一版という(148頁。同頁で『短篇小説』の刊年を1917年と誤る)。のちに触れる張恵175頁にも、1919年から1940年まで21回の再版、とある。
- 11) アルザス人だという説がある。中村敬「『最後の授業』についての覚え書き—三つの解釈をめぐって」『成城文藝』第133号 1990.12
- 12) 樽本照雄「ユゴーの漢訳名露俄について(上)(下)」『清末小説から』第97、98号 2010.4.1、1-8頁、2010.7.1、1-12頁。要約:ユゴーの日本語訳には2系統がある。英語系ヒューゴーとフランス語系ユゴーだ。日本では、一部に英語系ヒューゴーが使われたことがある。だが、ほとんどはフランス語原音を尊重してユゴーを使う。過去においてはユゴーとも表記した。中国語訳でもこの2系統がある。英語系ヒューゴーは露俄とし、フランス語系は兩果である。中国で特異なのは、長く英語系の露俄が使用されたことだ。では、誰がそれを何にもとづいて漢訳したのか。日本語を経由したことはほぼ間違いない、と韓一字はいう。だが、それらしい日本語訳を見ても決定的な証拠とはなりそうもない。露俄を最初に掲載した梁啓超の『新小説』雑誌に注目する。「露俄小伝」が人見一太郎『ユゴー』にもとづいていたことを明らかにすることができた。しかし、人見の表記はあきらかにフランス語系であって露俄とは一致しない。梁啓超自身は、徳富蘇峰の文章に依拠して姚哥と漢訳している。ユゴーの漢訳としては姚哥となる可能性の方が高かったと考える。だが、そうはならなかった。Hugo が英語読みされ南方音によって露俄とされたのである。現在のところ言うことができるのはそこまでだ。上下の2回に分載した。

傅兰雅与小说

刘 德 隆

上海杨浦教师进修学院

翻译界对傅兰雅其人、其事的关注已非一日。自上个世纪九十年代初，台湾黄锦珠教授、美国韩南教授开始提起傅兰雅与小说的关系。近20年里，断断续续的有人就傅兰雅与小说的关系进行探讨，但因为缺乏傅兰雅与小说的具体实例，研究者语焉不详。2011年《清末时新小说集》一书出版，傅兰雅逐渐受到近代小说研究者的重视。探讨傅兰雅及“时新小说”产生的原因、探讨傅兰雅对中国近代小说（晚清小说、新小说、清末小说）的贡献、“时新小说”与“新小说”的关系等论文日渐增多。本文试阐述傅兰雅与小说的关系。

一

根据笔者所了解，1861年 - 1896傅兰雅在中国35年，但没有见到1861年到1894年的33年间，傅兰雅与小说发生关系的文字记录。这33年间，傅兰雅在中国以翻译科学技术著作为其主要工作。

杨欣、李浩先生在《傅兰雅 致力于中国近代科学启蒙的传教士》一文中说

“傅兰雅在江南制造局翻译馆工作凡二十八年，他和他的同事合作翻译书共一百五十部，合一千卷。”（《南方文物》2006年第3期）

赵玉玲先生在《傅兰雅翻译选材研究》一文中说：傅兰雅翻译共129种，其中基础科学工作57种，应用科学48种，军事科学14种，社会科学10种，没有一种宗教类书籍。（《沈阳大学学报》2007年12月）

除以150部、129种两说外，尚有133种、139种等等诸说。以上说法当然是作者根据自己掌握的材料统计出的数字。

那么傅兰雅在中国期间究竟翻译了哪些书籍呢？有没有与小说有关的书籍呢？笔者以为，探讨傅兰雅翻译著作的数量、内容以张晓先生所编之《近代汉译西学书目提要》（2012年9月北京大学出版社出版）最为权威，原因有三：一、这是最新的研究成果。二、是其搜集数量远超此前诸说。三、此书根据《中国图书馆图书分类法》分类，读之一目了然。

根据《近代汉译西学书目提要》的记录，傅兰雅翻译作品共305种，内容分布于哲学、心理学、政治法律、军事类、经济类、文化教育体育、历史类、各国礼俗类、地理类、自然科学总论类、数理科学和化学类、天文历法类、测绘学类、地球物理类、气象学类、地质学类、矿物学类、自然地理学类、生物科学类、医药卫生类、农业科学类、工业技术类、交通运输类、综合性图书类。而宗教、社会科学总论、语言文字类、文学类、艺术类、传记类、考古类、地球物理类等8类的翻译数字是0。翻译具体数量可以见下表：

分类	数量	分类	数量
一、哲学类	1种	二、心理学类	1种
三、宗教	0种	四、社会科学总论	0种
五、政治法律类	7种	六、军事类	23种
七、经济类	7种	八 文化、教育、体育	6种
九、语言文字类	0种	十、文学类	0种
十一、艺术类	0种	十二、历史类	1种
十三、传记类	0种	十四、考古类	0种
十五、各国礼俗类	2种	十六、地理类	2种
十七、自然科学总论类	10种	十八、数理科学和化学类	77种
十九、天文历法类	3种	二十、测绘学类	6种
二十一、地球物理类	0种	二十二、气象学类	4种
二十三、地质学类	2种	二十四、矿物学类	5种
二十五、自然地理学类	2种	二十六、生物科学类	12种
二十七、医药卫生类	15种	二十八、农业科学类	10种
二十九、工业技术类	83种	三十、交通运输类	24种
三十一、综合性图书类	2种		

根据以上归类，可以知道傅兰雅翻译作品的基本情况：

- 1、傅兰雅翻译的作品几乎涵盖了自然科学和工程技术的所有门类。
- 2、傅兰雅翻译的作品中没有宗教类、社会科学总论类、语言文字类、文学类、艺术类、传记类、考古类的书籍。
- 3、傅兰雅的翻译作品中没有小说。

根据《近代汉译西学书目提要》的记录，中国自明末至清末汉译西学书籍共5179种，傅兰雅翻译305种，几乎占全部翻译书籍的1/20，其数量可观。但其在在中国生活35年中，前34年确实没有与小说发生过关系。

二

傅兰雅在中国35年（1861年-1896年），在第34年（1895年）和第35年（1896年）开始与小说发生了关系，那就是在《申报》和《万国公报》上发布了《求著时新小说启》。关于本次征文活动的过程及结果，周欣平先生在《清末时新小说集·序》中

已经叙述清楚。

“求著时新小说”活动的意义何在？在《清末时新小说集》出版前陆续已有论述：

1991年五月号的《中国文学研究》发表了黄锦珠先生的《甲午之役与晚清小说界》。文章中说“傅兰雅的《求著时新小说启》由于有具体手段（评名给奖）为号召，的确促成了一批‘时新小说’的创作，晚清受其影响的小说作者当不仅此数，而文中揭露的创作准则与标的，更足为晚清小说界变革的先声。”

1994年陈业东先生在《近代小说理论起点之我见》中谈到“我认为，……近代小说理论的起点另有所在，那就是由英国儒士傅兰雅在《万国公报》上刊登的《求著时新小说启》。”（《明清小说研究》1994年第一期）

同年王立兴先生在《一部首倡改革开放的小说——詹熙及其小说〈醒世新编〉论略》中谈到“傅兰雅所发起的这次小说征文活动，确实给原来暗淡、沉寂的小说界投下了一束火光，点燃了人们革新小说

的热情。”(《明清小说研究》1994年第一期)

1997年笔者在《1895年-1896年小说略说》中也谈到这一次征文:

……这一百六十二卷,虽然还有少量戏曲、道情、歌词之类掺杂其间,但就其数量而言,不可谓不多。因为这一数量已超过了自1840年至1985年小说数量的总和。但就其质量而言则不尽人意。……因目前未能见有关材料,只能留待以后。……从获奖小说作者二十人进行分析,可以有趣地发现,这二十人在《中国近现代人物名号大辞典》中,没有一个被收入。其中八人虽然使用的是笔名,而“醒世人”这一笔名在当时又无异有时代意义,再如“望国新”则很难确定其是笔名还是真名。但无论如何我们可以感到,在1895年时,一向以诗文为表达自己见解、感情的中国文人们已认识到,小说已是一种表达自己意见的方式,亦或是“醒世”的一种武器。总之小说已从“小道”之中走了出来,逐渐成为“大道”,而文人也可以借助“小说”去开辟自己的新天地。……对于《求著时新小说启》及《时新小说出案》在中国小说、近代小说、晚清小说史的研究上可以做出更详尽的分析。对于在这次征文中所出现的小说自可以更努力的发掘,这将是晚清小说研究者的工作。

(1997年1月1日《清末小说通讯》第44期)

在《清末时新小说集》发现和出版后,研究者讨论文字更是不断:

周欣平先生以为“傅兰雅在1895年发

起的这一次时新小说有奖征文竞赛在某种程度上影响了晚清小说的总体方向,它所产生的这批小说也可以被认为是现代小说的源头和前奏。”

刘琦先生在《晚清“新小说”的先声》一文说“傅氏之所以倡导小说创作,是力图提高小说文学地位,使其担负起政治责任,这与后来梁启超倡导‘小说界革命’的本意相契合。”(《北华大学学报》2012年第3期)

许军先生说在《傅兰雅小说征文目的考》中说“笔者认为,傅兰雅尽管提出种种口号,但发起小说竞赛最直接的原因是为了搜集东方的教学资料。”(《陕西师范大学学报》2012年第1期)

笔者在得知此这批征文稿件手稿发现后,认为这是“奇事”“幸事”,以为傅兰雅“功莫大焉”。原说如下:

呈 英国儒士约翰·傅兰雅先生
傅先生文席:

久闻 先生百余年前征求“时新小说”,得稿一百六十二份,且评定获奖者二十人、奖励大洋若干,小子羨甚。然近二十年来,寻寻觅觅仅见《求著时新小说启》及《时新小说出案》两文,于小说文本未能寓目。今忽得上海古籍出版社出版之《清末时新小说集》,知先生当年携此小说手稿漂洋过海,后周欣平先生发现于尘封之纸箱中,实为奇事,亦为幸事。先生于此,功莫大焉,故上书

以表敬意。匆匆尚此 即颂
天国大安 中国丹徒老九顿首 2011年
3月26日

(《留得·尾巴》2011年3月)

同时就《清末时新小说集》的具体问题，笔者与欧阳健先生进行了讨论：

呈 福建师范大学 欧阳健先生
欧阳先生教席：

久疏音信，时在念中。

近读美国 周欣平先生主编、上海古籍出版社出版之《清末时新小说集》，求教于后：

一、“时新小说”与“新小说”是否同一概念？

二、“第一次小说革命”的提法是否合适？

三、《清末时新小说集》是否能“改写中国小说史”？

四、大作《晚清小说史》若再版是否准备有所修订？

盼不吝赐教并 颂
教安

后学刘德隆敬上2011年3月26日

(《留得·尾巴》2011年3月)

欧阳先生作答于下：

“时新小说”答刘德隆先生
德隆兄：

年前曾往兄的邮箱发邮件，均被退回。托林骅兄代发，仍不奏效。昨日信手点开“中国古代小说网”，见《中国近代文学研究·留得》有兄3月26日来书，不禁惊喜万分。

承下问《清末时新小说集》，我至今未得寓目，仅能据报刊介绍，说一点

粗浅看法：

一、“时新小说”与“新小说”是否同一概念？

“时新小说”与“新小说”，虽都有一“新”字，但不是同一概念。“时新”即“时鲜”，上海人所谓“时鲜货”，辞典解作“应时而鲜美的东西”。傅兰雅之所谓“三弊”——鸦片、时文和缠足，现象上似乎触及若干时弊，但并没有提出解决的根本良方；况且那头一弊——鸦片，恰是他的祖国强加给中国人的。而梁启超“新小说”的“新”，源于“今日欲改良群治，必自小说界革命始；欲新民，必自新小说始”的认识，萦绕着作者心灵牵引着读者情感的，多是与民主富强相关的理想，在本质上是有别于传统小说的“新小说”，是广大新小说家在被严复称为“吾国长进之机”的形势下所交的一份爱国主义的答卷。

二、“第一次小说革命”的提法是否合适？

关于传教士，前三十年，人们多在意其文化之渗透；后三十年，人们又多颂扬其文化之启蒙。但真正的革命，不可能由外人导演而成。我不认为傅兰雅的征文比赛，是“第一次小说革命”。

三、《清末时新小说集》是否能“改写中国小说史”？

“时新小说”的发现，可以作为酝酿“新小说”传媒的补充材料，但不能“改写中国小说史”。1902年11月14日《新小说》创刊、梁启超的《论小说与群治之关系》及他创作的第一部严格意义上的“新小说”《新中国未来记》，

是晚清新小说正式降生的标志。

四、《晚清小说史》若再版是否准备有所修订？

浙江古籍出版社自萧欣桥、陈庆惠时代后，好像不太注重小说史，不闻《晚清小说史》再版的信息。我对徐生时光的分配，也不大可能为晚清小说多花气力，况且对于晚清的改革，也少了当年的激情，眼下尚没有修订《晚清小说史》的打算。

这样的回答，不知是否合格？

徐不一一

祝

大安！

欧阳健

2011年4月1日

傅兰雅的“征求时新小说”活动，至今已经将近120年，对它的研究时断时续，但是它一直被近代小说研究者所关注。从目前所见文章分析，这一研究仍停留在对征文活动的过程、意义等问题的探讨，少涉其它。笔者以为，下一步应该对小说文本给予更多的关注，从小说的体裁、语言、内容，叙事方法、对社会的描写反映以及对此后小说的影响等多方面进行研究，这样必将会有新的发现，会对近代小说的研究有所助益。

三

检讨傅兰雅西书中译的成就，他在中国35年的翻译集中于科技工程方面，至第34年才发起了与小说有关的“征求时新小说”活动。此活动又因为傅兰雅本身离开中国而中断。周欣平先生说“对傅兰雅来说，他在1895年举办的时新小说有奖征文，

仅仅是他许多事业成就与贡献中的一个小插曲而已。”那么难道傅兰雅与小说的关系就真是偶尔为之吗？回答是否定的：张政、张卫晴在《近代翻译文学之始——蠡勺居士及其〈昕夕闲谈〉》（《外国教学研究》2007年11月）一文中提到傅兰雅曾经翻译《昕夕闲谈》为中文，其本自樽本照雄先生编辑的《清末民初小说目录 第5版》（2013年清末小说研究会）

X1896*《昕夕闲谈》(重訳)上集2册

(英)傅蘭雅口訳 上海顏惠廉筆述
上海・百新公司1923.3 / 1923.7

EDWARD BULWER LYTTON “NIGHT AND MORNING” 1841。韓南「是長篇小説「夜与晨」的前半部」。上海文宝書局本と同文[現代895]1923年重版[振環68]澄江徐鶴齡校閲

X1897*《昕夕闲谈》上集31回 下集20回

(英)傅蘭雅口訳 顏惠廉筆述
上海・百新公司1927.7重訳

EDWARD BULWER LYTTON “NIGHT AND MORNING” 1841。韓南「是長篇小説「夜与晨」的前半部」[民外1134]封面題「英国名家著章回小説」。上集31回，下集20回(未見書)

这确切无疑的说明，傅兰雅在翻译小说方面也有实际行动。遗憾的是笔者近年遍寻此书而不成，只能根据樽本照雄上述文字简略的讨论如下：

(一)、《昕夕闲谈》有几种翻译本？

第一种《昕夕闲谈》翻译本连载于1873年-1875年《瀛寰琐纪》。翻译者署名“蠡勺居士”。这种翻译本，后有两种“申报馆本”单印本。

1904年又有文宝书局出版黎床卧读生重译本，这是第一种重译本。

同年文宝书局出版约纳约翰重译，李

约瑟笔述本这是第二种重译本

1923年文宝书局出版傅兰雅口译、颜惠廉笔述本。这是是第三种重译本。

(二)、傅兰雅为什么要重译《昕夕闲谈》?

没有见到傅兰雅对此的任何说明。但是,在明知已有第一种翻译本,又有两种重译本的情况下而有意的“重译”,至少说明翻译者对原译本有不同见解和意见。

(三)、傅兰雅重译的《昕夕闲谈》章节字数是多少?傅兰雅重译《昕夕闲谈》本,有两中版本。前一种版本“重译·2册”,后一版本记录为“上集31回、下集20回”。字数不明。与蠡勺居士“申报馆仿袖珍板”《昕夕闲谈》比较有一定差异。“申报馆仿袖珍板”《昕夕闲谈》“上卷十八节”、“次卷十三节”、“三卷二十四节”。约184000字。

4、傅兰雅何时翻译《昕夕闲谈》?

1896年傅兰雅已经离开中国,但此后不断往返与两国之间。傅兰雅翻译《昕夕闲谈》于1923年出版。因此傅兰雅何时、何地翻译《昕夕闲谈》又如何出版此书,只有在见到原书的情况下才有可能得出结论。

5、傅兰雅口译、颜惠廉笔述的《昕夕闲谈》本,其翻译质量又如何呢?因未见原作,无法评判。但他是两个人合作的结果:“口译者”傅兰雅是本文讨论的主要人物,“笔述者”颜惠廉。颜惠廉又是何许人、有无林琴南之才呢?这决定着这一翻译本的质量。笔者目前并无任何资料,难于置喙。

中国近代的翻译,多一人“口译”,一人“笔述”的方法。郭延礼先生在《近代西学与中国文学》(P.22)中引用傅兰雅本人的文字:

至于(江南制造局翻译)馆内译书之法,必将所欲译之书,西人先熟览胸中而书理已明,则与华士同译。乃以西书之义,逐句读成华语,华士一笔述之;若有难言处,则与华士斟酌何法可明;若华士有不明处,则讲明之。译后,华士将初稿改正润色令合于中国文法。

这种翻译方法究竟如何呢?至少在当时就颇有微词,如吴沃尧就用小说的笔法抨击这方法:

其实,我看是没有一处不糜费。但是局里用的几个外国人,我看就大可以省得。他们拿了一百、二百的大薪水,遇了疑难的事,还要和中国工师商量,这又何苦要用着他呢?还有广方言馆那译书的二、三百银子一月,还要用一个中国人同他对译。一天也不知译得上几百个字。成了一部书之后,单是这笔译费就了不得。我道:“却译些什么书呢?”佚庐道:“都有。天文、地理、机器、算学、声、光、电、化,都是全的。”我道“这些书倒好,明日去买他两部看看,也可以长点学问。”佚庐摇头道:“不中用。他所译的书,我都看过,除了天文我不懂,其余那些声光电化,我都看遍了,都没有说完备。说了一大篇,到了最要紧的窍眼,却点不出来。若是打算看了他作为谈天的材料,是用得着的;若是打算从这头上长学问,却是不能。”我道:“出了偌大薪水,怎么译成这么样?”佚庐道:“这本

难怪。大凡译技艺的书，必要是这门技艺出身的人去译。还要中西文字兼通的才行，不然，必有个词不达意的毛病。你想他那里译书，始终使一个人，难道这个人就能晓尽了天文、地理、机器、算学、声、光、电、化各门么？外国人单考究一门学问，有考了一辈子考不出来，或是儿子，或是朋友，去继他志才靠出来的。谈何容易，就可胡乱可以译得！只怕许多名目还闹不清楚！何况有时是两个人对译，这又多了一层膜了。”（《二十年目睹之怪现状》第三十回）

吴沃尧对这种翻译方法是否定的。虽然，这段文字没有明指傅兰雅，但是江南制造局翻译馆中的外国人不过寥寥数人，而傅兰雅又是翻译数量最多的人。那么可以说，吴沃尧对傅兰雅的翻译总体是否定的。

邹振环先生在《影响中国近代社会的一百中译作》中充分肯定了蠡勺居士所译的《听夕闲谈》。但是对包括傅兰雅等所译的另外三种《听夕闲谈》持否定态度：

经笔者查对，三书内容完全一样，可见所据是《申报》馆版。后两版改头换面，无非有哗众取宠，以扩展销路的用意。

根据邹振环先生的叙述，1、可以理解傅兰雅的翻译是一种变相的抄袭行为。2、傅兰雅翻译的《听夕闲谈》本仍存于天然间，对讨论这一问题提供了新的线索。对傅兰雅的讨论有了新的依据，这无疑是一件大好事。

本文讨论傅兰雅与中国小说的关系，是希望能够引起对傅兰雅其人其事的关注，更是这样希望能够促进对1895年傅兰雅小说征文的研究。由于掌握资料有限，错误必多，敬请批评指正。

2013年8月9日于上海浣纱六村 囧

【注解】

感谢黄锦珠先生惠我《甲午之役与晚清小说界》电子稿。

《留得》是笔者个人编印的关于中国近代文学研究的油印小报，2009年停刊。2011年2月因知《清末时新小说集》出版，又编印一期名为《留得·尾巴》。2013年将残稿装订为《留得合集》以做纪念。

邹振环先生的《影响中国近代社会的一百种译作》已经出版，但未能寓目。此根据网上下载。

中国近代文学学会小说分会第四届年会暨中国近代小说学术研讨会 2013年9月·开封·河南大学

姚一鳴『文学背後的世界 民国文人写作、出版秘事』

台湾·新銳文創（製作發行：秀威資訊科技股份有限公司）2013.5

「文人旧事」 風雨飄渺独自在（辛亥革命前後的周作人）/五四以前的劉半農/李涵秋
上海一年/陸費達和商務中華教科書之爭

「文人書事」 李伯元、《遊戲報》和花榜/丁悚：画過《礼拜六》封面的人/天虛我生亦有用（天虛我生与《文苑導遊錄》）/曾樸与《真美善》雜誌/曾樸和小説林社/周氏兄弟訳《域外小説集》出版始末/平襟垂<書城獵奇>/茅盾和《小説月報》革新前後的新旧文学之爭

徐兆璋日記中的近代小說與出版史料 1

——以小說林社為中心

樂 偉平 選註

按語：徐兆璋（1867-1940），字少達，號倚虹，又號虹隱，別署劍心，江蘇常熟人。1890年進士，選翰林院庶吉士，授編脩。1907年，赴日本學習法政，加入同盟會。辛亥革命后，曾任常熟代理民政長。民國元年（1912），與瞿啟甲等選為第一屆國會眾議員。1917年，因曹錕賄選總統，拒賄南歸，從此無意政治，專註于家鄉事務。《徐兆璋日記》，自光緒二十年二月十二日（1894年3月18日）始，終於民國二十九年六月十二日（1940年7月16日）。原稿藏常熟市圖書館。

徐兆璋的日記中，保留了大量的近代小說與出版史料。徐兆璋對新小說極感興趣，日記中多有記錄和評論。作為“出於舊學界而輸入新學說者”¹，其觀點很有代表性，對我們瞭解晚清的小說觀很有幫助。如：徐兆璋提到對小說譯筆、文筆的要求，反對小說復譯，反對偵探、言情小說汎濫等，甚至還編了一本譯本小說提要《黃車掌錄》。

由于他是常熟人的緣故，與小說林社的曾樸、丁祖蔭、徐念慈等人非常熟識，日記中因此保留了大量關於小說林社的史料。其中最有意義的當是小說林社的經營情況：該社于1905年、1906年頗有盈利，而1907年賠累甚巨。另可見，小說林

社除曾樸、丁祖蔭、徐念慈等廣為人知的成員外，還有王夢良（又叫王采南，“夢良”與“采南”哪個是名，哪個是字，待攷。）與鄒仲寬兩人。

徐兆璋日記中，還保留了不少關於黃人編輯的《雁來紅叢報》的史料。從中可以看出，《雁來紅叢報》早在1902年就有意籌辦，1906年4-5月，出版第一期，共十期，至1907年8月前停刊。編輯主要有常熟人黃人、孫景賢和張繼良。徐兆璋為《雁來紅叢報》提供了大量明季野史，還為該刊的發展提了不少建議。此外，曾樸不願意代發行《雁來紅叢刊》，因其中有忌諱處，也是以前未發現的史料。

本文所列的日記標題《劍心移壬寅日記》、《癸卯日記》、《劍心移乙巳日記》、《燕邸日記》、《燕臺日記》、《丁未日記》、《戊申日記》、《虹隱樓日記》，均為日記原封面標題。標點為選註者所加。日記原文有筆誤處，依原樣錄入，併在其后用方括號標出正確的字；根據文意增補的字，用圓括號標出。日記原文中的小字照錄，併用五號字體表示。

本文註釋中所列的小說，除特別標出者外，均為小說林社出版。註釋中的“甲辰”，即1904-1905年，“乙巳”即1905-1906年，“丙午”即1906-1907年，“丁未”即1907-1908年，“戊申”，即1908-1909年。凡用漢字表示的月份，均指農曆。

劍心移壬寅日記 光緒二十八年（1902）

十一月十九日乙亥（1902年12月18日），陰雨。
復（孫希孟²）書云：“前日翥叔³述及有集股

¹ 覺我《余之小說觀》，《小說林》第十期，1908年4月。

² 孫景賢（1880-1919），清末民初小說家、詩人。字希孟，號龍尾，別署阿員、藤谷古香，江蘇常熟人。1907年，其師張鴻任駐日本長崎領事，景賢隨張東渡供職，併就讀于日本明治大學法律科。歸國，賜舉人出身。入民國后，就職于外交部。著有小說《轟天雷》，另有《龍吟草》甲、乙二卷，《梅邊樂府》二卷。

³ 徐鳳標，字翥青，江蘇昭文（今屬常熟）人，1918年任江蘇省議員。

印小說報之舉。鄙意章回、彈詞，較傳奇更難，新小說萬難學步，不如取其舊者。明季野史多可喜愕，誠能彙集數十種，雜以新譯東西小說及近人所著小種可愛玩者，月出一冊，亦足一新眼界。從前申報館印《紀載彙編》，亦是此法。惜僅兩冊而止。今另開略例一紙，乞與海平諸君酌之。

一、命名。當如《紀載彙編》之例。

一、征書。章回小說為一類，彈詞為一類，此二類最難，須取有益政治者。譯東西小說為一類，傳奇為一類，明季野史為一類，鄙處此類最多，如《海虞妖亂志》及《過墟志感》校本，皆上駟也。本朝野史為一類，近時日記附此類。筆記為一類，或雜記掌故，或兼述時事，或攷據西學，或講求古玩，均入此類。詩詞為一類，當如《南宋雜事詩》、《本事詞》之屬編成一種者。遊戲文章如燈謎、酒令之屬，亦以輯成卷帙為貴。

一、計費。每冊若干頁，印訂若何計費，每冊幾何，每期幾冊，立一預計表。

一、集股。計費定后，約半年，需若干，再合股，每股每月若干。約半年后收報費，可以周轉，便可立定腳跟矣。”

十一月二十日丙子（12月19日），晴。

與唐海平⁴書云：“希孟尚在寓否？一緘乞附致，內有小說報章程一紙，乞細閱之，餘俟續布。”

癸卯日記 光緒二十九年（1903）

四月十一日乙未（5月7日），陰。

孫希孟函云：“寺前新開海虞圖書社，係芝蓀⁵、遠生⁶諸人集股，叢報、譯書頗備。”

⁴唐人傑，字海平，江蘇太倉人，為小說林社譯有《小公子》（1905年版）。1902年，入常熟人張鴻、徐鳳書等設立的中東亞譯書會。1905年，留學日本，譯稿為生。其譯作除《小公子》外，還與徐鳳書合譯《破天荒》、《模範町村》兩種小說，與徐有成、胡景伊合譯《歐羅巴通史》。

⁵丁祖蔭（1871—1930），字芝孫，號初我，江蘇常熟人。1904年，與曾樸、朱積熙等人創辦小說林社，《女子世界》、《理學雜誌》的發行人與主辦者，著名藏書

劍心移乙巳日記 光緒三十一年（1905）

正月二十七日庚子（3月2日），晴。

唐海平二十四日來，囑寄其所譯《小公子》⁷一回與丁芝孫，詢小說林中要購否？

二月初四日丁未（3月9日），陰。

丁芝生（孫）復函云：“《小公子》一書，可售于小說林，譯費每千字計洋一元五角。”即將譯稿寄翥青叔交海平，因翥青叔于日內至太倉，可與海平會晤也。

二月二十二日乙丑（3月27日），晴

作詩《秘密使者》⁸五絕句：歡宴新宮玉漏長，鼓聲驚破舞霓裳。西廂夜半聞私語，一片疑雲費揣量。——《莫斯科新宮之夜宴》領土安危係一書，禁中使者竟何如。鬥罷舊境依稀認，垂白護堂望

家。

⁶朱積熙，字遠生，常熟人，小說林社的創辦者之一（小說林社登記時，註明負責人為“孟芝熙”，即曾樸、丁祖蔭、朱積熙三人合名），常熟教學同盟會會員，江蘇教育會會員。1903年5月，與丁祖蔭集股開設海虞圖書館，售書為主，兼發行新書。1904年，與徐念慈、丁祖蔭等人創辦競化女學校，這是常熟最早的女學堂。

⁷《小公子》，小說林社員（即唐人傑）譯，上卷乙巳七月初版，下卷乙巳十一月初版。據樽本照雄《清末民初小說目錄》（第5版）X0876條，該書的原作是FRANCES ELIZA HODGSON BURNETT “LITTLE LORD FAUNTLEROY” 1886。（美）WARREN, ELIZA 改寫，日本若松賤子據改寫本譯為《小公子》（《女學雜誌》1890.8-1892.1，博文館1897.1）。《清末民初小說目錄》（第5版），日本：清末小說研究会，2013年版。唐人傑即從日文譯出。

⁸《秘密使者》，法國迦爾威尼（即凡爾納）著，吳門天笑生（即包天笑）譯述。上卷甲辰六月初版，下卷甲辰八月初版。徐兆璋為該書的每一章都作了一首絕句，每首詩最後帶書名號的內容，即該首詩所歌詠的小說章節的題目。據樽本照雄《清末民初小說目錄》（第5版）M1083條，該書的原作是JULES VERNE “MICHEL STROGOFF DE MOSCOU À IRKOUTSK” 1876。英譯“MICHAEL STROGOFF”。羊角山人譯述、森田思軒刪潤《盲目使者》（《郵便報知新聞》1887.9.16-12.30）。改題《瞽使者》（報知社版，上1888.5.15 / 下1891.11.2）。包天笑即從日文譯出。

倚間。——《飛使》 賤族飄零賣技車，避人偵視意何居。中原逐鹿誰先得，劉項今宵識面初。——《尼塞尼之道中》 市場逐客令新頒，女伴提攜一破顏。紅粉青衫天作合，龍沙萬里玉雙環。——《哥哥去休，哥哥去休》 絮語微聞遜克兒，宮闈秘密有人知。天教叛將逃羅網，險絕加桑上路時。——《高加索汽船之中》

閱書《秘密使者》一卷上卷。此卷譯筆頗佳，可與《茶花女》抗衡。中原餘子碌碌，等諸自鄙以下。

二月二十三日丙寅（3月28日），晴。

作詩《秘密使者》五絕句：插天山脈劃銀沙，板屋奔馳午夜車。旅客區分鴉與鷺，一鞭遙指月輪斜。——《板屋車與裸體車》 左迎削壁右深淵，木石當頭勢轉旋。烏拉山中風雨夕，一車如葉牽生全。——《烏拉山中之大風雨》 旅客兩人車半部，中途遺失記新聞。國民解體渾如此，笑倒詠諧絕妙文。——《車半部，客二人，途中之遺失物也》 少年胯下淮陰屈，武士車前穆勒卑。萬死不甘為決鬥，英雄忍耐兩心知。——《萬死不願決鬥》 芒唐豺虎路縱橫，裹創茅簷慶再生。三日光陰擲虛牝，圓蒼故意誤郵程。——《土耳其斯坦兵》

閱書《秘密使者》一卷下卷。

二月二十五日戊辰（3月30日），晴。

閱書《法國女英雄彈詞》⁹一冊，記羅蘭夫人事。雖筆勢平妥，然亦頗便於下等社會。較《天雨花》、《來生福》不及，比《三笑姻緣》、《玉蜻蜓》之誨淫，固遠勝之也。

四月初五日丁未（5月8日），陰，兩竟日。

作詩《秘密使者》四絕句：明駝翠幕鬱雲蒸，茶火軍容虎氣騰。誰識楚囚心事苦，紅顏白髮恐難勝。——《可汗之陣營》 造化無端遇合奇，承歡佳婦替佳兒。此中自有因緣在，憔悴長途不忍離。——《兩女囚》 溝水東西各自流，銀河咫尺會牽牛。生憎石闕猶銜口，一抹紅牆兩地愁。——《意外之遇》 分我杯羹莫詭渠，海濱竊負較何如。

⁹ 《法國女英雄彈詞》，挽瀾詞人（即命天憤）著，甲辰八月版。

歐洲驕虜猶人子，那有家庭革命書。——《聊報汝以春之一鞭》

四月初六日戊申（5月9日），乍雨乍止。

作詩《秘密使者》四絕句：此後惟娘可見兒，兒生無復見娘時。兩行血淚填胸臆，勝讀蘭陔補闕詩。——《盲目之刑》 未能徒步當安車，附翼樊鱗樂有餘。話到吟詩傳電事，兵戈叢里一軒渠。——《馬車之少年》 萬灶無煙冷戍樓，移民避寇豈良謀。可憐國破山河在，鉤起羈人一夜愁。——《死都會》 夜渡無舟阻馬韁，革囊橫截水中央。旋渦雖險終能濟，誰說風波不可防。——《葉尼塞河》

四月初七日己酉（5月10日），晴。

作《秘密使者》五絕句：見兔懷疑競隕生，神權迷信出真誠。熱心幸為傾城死，贏得香花供墓塋。——《地上之人頭》 欲離虎暴入狼群，地棘天荊詎足云。不冒冰霜難練骨，國民進步安從軍。——《狼群》 謹傳飛使達圍城，叛將陰謀喜告成。信信張惶強敵勢，一時股掌玩孩嬰。——《大公爵之宮中》 高壁輕投一紙丸，東門管鑰幾難完。如斯間諜終亡滅，始歎兵家冒險難。——《土耳其斯坦兵之內應》 萬苦千辛持使節，大功圓滿釋肩任。一篇秘密行人傳，兩字團樂兒女心。——《噫，渠能視也》

清末小説から

工藤貴正 近代的<鬼>概念の成立 周作人『孤兒記』から魯迅『狂人日記』への系譜 伊藤徳也編『周作人と日中文化史』 勉誠出版2013.5.20

長堀祐造 魯迅「狂人日記」材源考 周氏兄弟とソログープ 伊藤徳也編『周作人と日中文化史』 勉誠出版2013.5.20

湯克勤、李珊編著 『近代小説学術档案』武漢大学出版社2013.6 陳文新主編「中国学術档案大系」

王 向遠 『中国比較文学百年史』北京・中国

- 社会科学出版社2013.7
- 李 亜娟 『晚清小説と政治之關係研究(1902-1911)』北京・中国法制出版社2013.8
新世紀學術文庫
- 藤井得弘 知りすぎた男 傲骨『砒石案』と中国初期探偵小説創作のジレンマ 『野草』第92号 2013.8.1
【書評】中国探偵小説研究のための新たな資料集 任翔・高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』『饗饗』第21号 2013.9
- 商 磊 吳趸人『二十年目睹之怪現狀』における買弁の形象 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第34号 2013.9
- 池田智恵 怪盗から武俠へ 近代中国におけるアルセーヌ・ルパンの軌跡 『饗饗』第21号 2013.9
- 李俊領著、村田久美子訳 清末民国期の雑誌データベース 『晚清期刊全文数拠庫一八三三-一九一一』『中文期刊全文数拠庫一九一一-一九四九』を利用して 『東方』第392号 2013.10.5
- 謝 仁敏 晚清商務印書館在近代小説發展中の典範意義 『出版科学』2009年第6期第17卷 2009.11.15
- 付 建舟 清末民初日語文学的漢訳与中国文学的現代轉型 『外国文学評論』2009年第4期 2009.11.18
清末民初新小説広告の文学史意義 『文学評論』2012年第6期 2012.11.15
『近現代轉型期中国文学論稿』南京・鳳凰出版伝媒集団、鳳凰出版社 2011.6
- WANLONG GAO(高万隆) 『RECASTING LIN SHU』 TRAFFORD PUBLISHING, 2009.11.30
- 任 百強 『我仏山人評伝』香港・中国評論學術出版社有限公司2010.2
- 任東升、袁楓 清末民初(1891-1917)科幻小説翻訳探究 『上海翻訳』2010年第4期 2010.11.10
- 姚 朝文 百年吳趸人研究的回顧与評価 『仏山科学技術学院学報(社会科学版)』第30卷第2期 2012.3 電字版
- 顧 鈞 《炭画》の中国之旅 『魯迅研究月刊』2012年第3期 2012.4.10
- 段 懷清 商務印書館《圖書彙報》中の林紆 一種基於文学出版与伝播の歴史考察 『福建師範大学学報(哲学社会科学版)』2013年第1期(総第178期) 2013.1.28
- 張 全之 『中国近現代文学的發展与無政府主義思潮』北京・人民出版社2013.3
- 梅 家玲 発現少年, 想像中国 梁啓超「少年中国説」の現代性、啓蒙論述与国族想像「輯1・発現少年与小説教育」『從少年中国到少年台湾: 二十世紀中文小説の青春想像与国族論述』台湾・麦田出版、城邦文化事業股份有限公司2013.3.7
小説教育 包天笑与清末民初的教育小説 同上
- 卓如、魯湘元主編 『二十世紀中国文学編年(1900-1931)』石家莊・河北出版伝媒集団、河北教育出版社2013.4
- 袁 進 (『中国近代文学編年史 以文学広告為中心(1872-1914)』) 前言 袁進主編 『中国近代文学編年史 以文学広告為中心(1872-1914)』北京大学出版社 2013.5
- 錢 理群 (『中国現代文学編年史 以文学広告為中心(1915-1927)』) 前言 錢理群主編 『中国現代文学編年史 以文学広告為中心(1915-1927)』北京大学出版社 2013.5
我的文学史研究情結、理論与方法 《中国現代文学編年史 以文学広告為中心》書後 『中国現代文学研究叢刊』2013年第10期(総第171期) 2013.10.15
- 余 来明 “文学” 觀念転換与20世紀前期的中国文学史書写 『文学遺産』2013年第5期 2013.9.15
- 李 斌 清末古文家与中国国文教科書の編写 『文学遺産』2013年第5期 2013.9.15

『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説
學術研討會論文集』
開封·河南大学文学院2013.9

貝青喬《爬疥漫録》略論.....馬衛中、陳国安
王鍾麒与《神州日報》.....鄧百意
集歷史文献与文学鏡像於一身的民初期刊《中華
小説界》.....王国偉
論林紓小説中的辛亥革命叙事.....王鳳仙
論晚清小説的悲憤意緒.....王同舟
翻新小説的文化意蘊.....王 慎
梁啓超小説戲曲中的粵語現象及其意義
.....左鵬軍
清末民初新小説廣告的文学史意義.....付建舟
黃世仲報業活動与小説創作之關係探析...紀德君
方苞古文理論的破与立 讀沈廷芳《書方望溪
先生伝後》.....石 雷
一部反封建的奏鳴曲 清代艷情小説《載花
船》之卷三.....劉 琦
傅蘭雅与小説.....劉德隆
男人女音·女人男音 徐枕亞《玉梨魂》与秋
瑾《精衛石》对読.....劉 濤
近代來華法国耶穌会士对中国文学中他界書写的
紹介.....劉麗霞
家庭小説的興起与民族国家的想像.....劉 釗
晚清小説《市声》中的科技理念.....劉永麗
林訊《茶花女》何以成功登陸中国文学...李宗剛
論魯迅小説創作的現代性自覚 從傳統文化而
來的現實批判和啓蒙追求.....李生濱
論王闈運的《封神演義》研究.....李亞峰
錢鍾書眼中的散原詩歌.....李開軍
青出於藍勝於藍? 論《蕩寇志》的藝術優劣
.....許景昭
百余年近代小説研究大事記.....湯克勤
前五四時期女性期刊中的女性自叙体叙事創作
.....杜若松
《盧梭魂》作者考.....宋慶陽
論《二十年目睹之怪現狀》的自伝性質...何宏玲
淺析《風月夢》的写実性.....湯柳、湯萍
国民意識与清末政治小説中的国民想像...趙連昌

談女性家庭角色的模塑 以冰心女性思想為例
.....趙思奇
二十世紀初留学生訳者特点剖析 以吳禱《小
説月報》前期(1910-1920) 翻訳作品為例
.....趙 霞
試論霍桑形象的文化双構性.....姜維楓
《老殘遊記》与泰山自然風光和民俗文化研究
.....張 鵬
從胡適改創《西遊記》第八十一難探討其仏学思
想.....張 惠
文学空間論域下的《花月痕》叙事.....周 芳
淺析時新小説之新特質.....周 倩
晚清“小説入報”考.....段懷清
抨擊与憧憬:晚清小説中的民俗国家想像 以
晚清譴責小説、翻新小説、科学小説為主
.....侯運華
草色遙看近却無 近代包公小説的“開封書写”
.....鄧冬萍
《女獄花》是革命派小説嗎?.....郭長海
別樣的學術交流平台 《〈中国近代文学大系〉
編輯工作信息》的学术史意義.....郭浩帆
《老殘遊記》中的城市書写.....郭小軫
清末烏托邦小説中的“中国夢”叙事.....郭建鵬
新文学形態的小説難形 試論晚清西方伝教士
翻訳的《天路歷程》白話訳本の現代意義
.....袁 進
王韜的小説思想.....党月異
《風月夢》中的两性張力.....徐志平
「新女性」的異面:晚清男女作家小説的不同呈現
.....黃錦珠
一個故事,兩種講法 《蜀川夫人》与《自由誤》
对読記.....黃湘金